道頓堀
第十一年
第六号
八十翁 貞信 貞信

〔主治効能〕

胃酸過多症

胃痛、溜飲

悪酔、宿酔（ふつかよひ）

さけ、たばこのみ過ぎにも

制酸・鎮痛・劑

ノルモザン錠

ノルモザン錠は珪酸アルミニウム（醫家用ノルモザン）を主成分とし之にロートエキス、薄荷腦を配した錠劑で、胃酸制止・胃粘膜保護・鎮痛の効果を併有する學理的製劑です

【作用】 服用後先づ胃粘膜を被覆防護して、患部に及ぼす胃液の刺戟を遮ぎり、次いで胃中で徐々に分解して珪酸と塩化アルミニウムとなり、前者は過剰の酸分を吸收して胃酸量を適度ならしめ、後者は胃腺を收斂して胃の機能を調整し、胃液分泌を節減します。尚ほ本劑には強力鎮痛劑たるロートエキスを配伍せしめ胃痛に對する効果を全たからしめてあります。

【用法】 一回二錠宛、一日三回食前一時間位に服用す

【價格】 六錠入（一日分）二〇錢のほか 一八錠入、四錠入 六六錠入、一八〇錠入、三六〇錠入の各種あり。

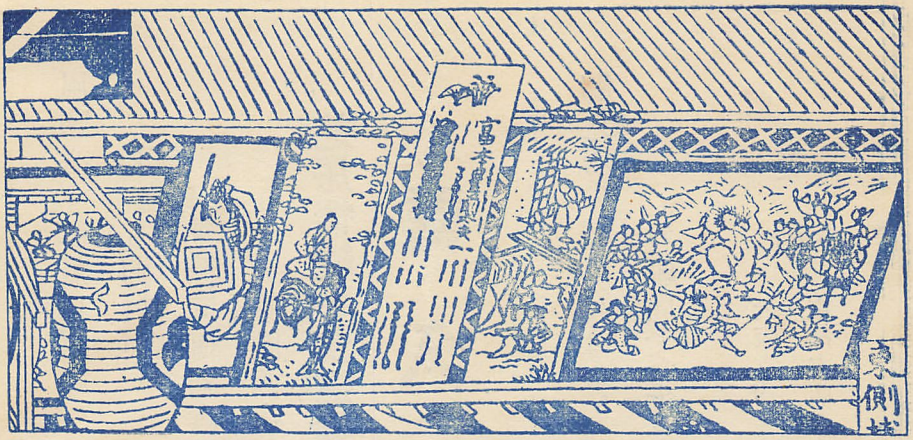
全國知名の藥店に販賣してゐます。

發賣元 株式會社 武田長兵衛商店

大阪市東區道修町

36—438(O)

風味必ず御氣に召す
天ぷら御料理
季節向御料理
佛蘭西御料理
芝居情緒と食道樂
喜久屋食堂
道頓堀戎橋北詰
御芝居の歸りには打ち揃ふて
お座席で是非御會食を！
支店
大阪支店　心齋橋筋八幡筋角
北新地裏町
京都支店　木屋町ドングリ橋



◇道頓堀・第十一年・六月號・第百十七輯◇

口繪

◆中座・魁車の多助・塩原と籠釣瓶ライカ特寫（十場面）壽三郎の治郎左衛門・魁車の八ッ橋・◆歌舞伎座・喜多村の細木春之進・河合のおふみ・勸進帳グラフ・（南座）花柳のお梅・「明治一代女」「片時雨」「鉈」舞臺面・◆浪花座・栗島の照子・岩永の夫富山◆角座・若葉のお高・梅野井のお千代・寺田の彌一郎・滿田の横川・島田の滿子・◆文樂座新曲連獅子・榮三・文五郎

◆表紙……塩原多助
◆扉……中村芳子

友禪のこと……岡本綺堂（二）
「空想部落」作者と私の因縁話……寺田鼎（三）
戀扇に就て……食滿南北（六）
多助のこと……中村魁車（七）
僕の持役……笈川武夫（七）
日本俳優學校の人々……菱田正男（八）
日本俳優學校生徒諸君を迎えるに際して……關西新派CC倶樂部（八）
臺詞集
塩原多助經濟鑑……（一一）
籠釣瓶花街醉醒……（一三）

籠釣瓶について……辻田公紀（一四）
勸進帳「辨慶の型」……編輯部編（一六）
連獅子作曲のこと……鶴澤道八（一九）
・五月東京・
三座觀劇記……大橋孝一郎（二〇）
我當・扇雀・勘彌・松莚　樂屋で語る……姉小路孝（二六）
三つの役……中村芳子（三一）
・讀者寄稿・
中村扇雀禮讃……木谷利夫（三三）
大阪好劇家に寄す……水落露山（三三）
青年歌舞伎の勸進帳……森ほのほ（三四）
熱だけで……守田勘彌（三六）
小春の着付……中村成太郎（三六）
大森痴雪さんを悼む……鳥江銕也（三八）
大役の數々……片岡我當（四一）
お時ちゃん！……栗島すみ子（四一）

漫畫……大槻たもつ
カット……山中虹二
編輯後記……大橋孝一郎
村上勝（四二）

冷用
銘酒
白雪

一盞！
清涼湧き陶然たる快味

摂津・伊丹・灘
小西酒造株式會社

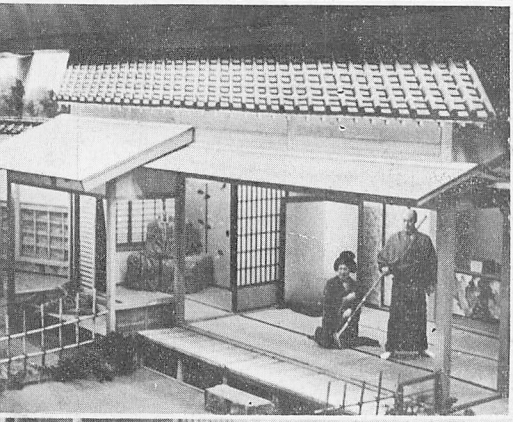
「鑑濟經助多多原壇」

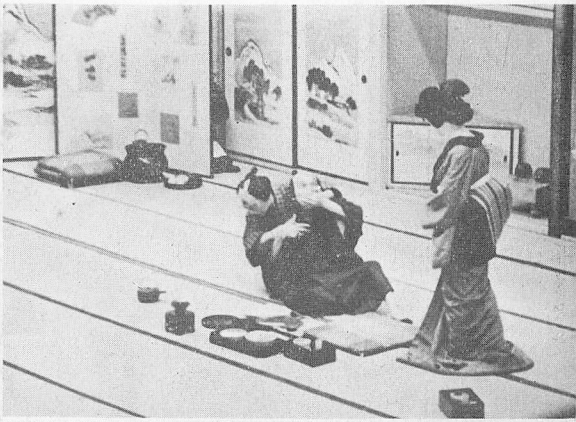
壇原　多助　魁車

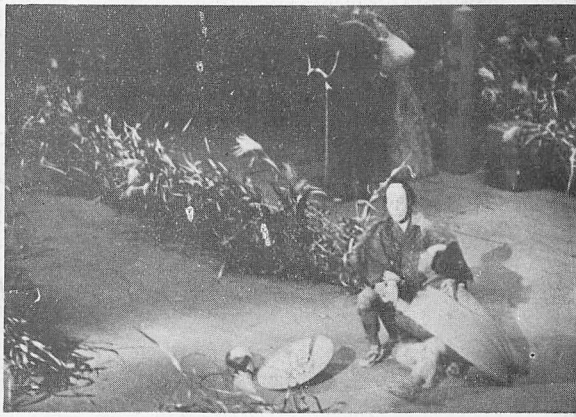
中座大歌舞伎

カイラ特寫

大橋孝一郎撮影







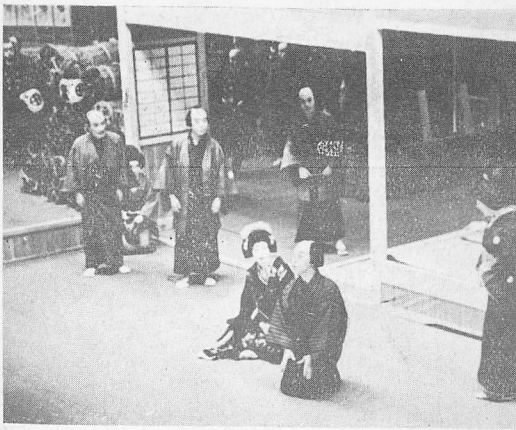
①
後家お龜　錦吾
吾八　箱登羅
多助　魁車

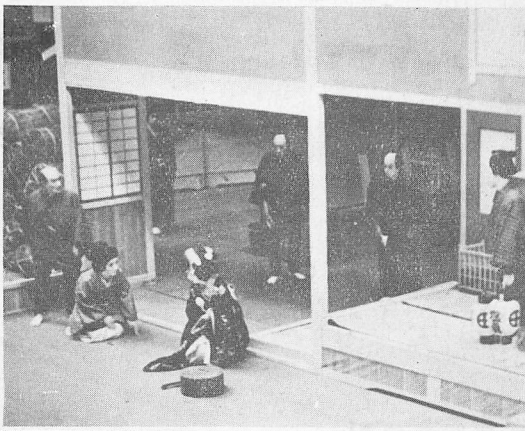
②
円次郎　霞仙
多助　魁車

③
下男吾八　箱登羅
丹三郎　小太夫

④
角右衛門　壽三郎
妻お清　霞仙
多助　魁車

⑤
後家お龜　錦吾
万太郎　井上
多助　魁車





●塩原多助●

と

●籠釣瓶●

⑥ 母お清　霞仙
⑦ 多助　魁車
お花　芳子
荷主　小太夫
樽久　吉三郎
杢右衛門　段猿

⑧ 花魁九重　延三郎
治郎左衛門　壽三郎

⑨ 八ッ橋　魁車
下男治六　小太夫
治郎左衛門　壽三郎

⑩ 八ッ橋　魁車
治郎左衛門　壽三郎
九重　延三郎
七越　錦吾
丹兵衛　箱登羅

「醒醉街花瓶釣籠」

郎三壽　　門衛左郎治野佐

車魁　　橋ツ八魁花

キッコーエー醤油
伏見で生れる
天下の銘醸
マルタケ醤油
丸竹
丸竹醤油株式會社

初恋日記

伏見信子
松平晃 主演

オール・トーキー

梨園の寵兒
市川男女之助
入社第一回主演

歡迎出演
松本泰輔
荒木忍
岡崎光彦
國友和歌子
大谷日出夫
森靜子
歡迎特別出演

晴れ時一本槍

雜誌 富士所載
原作 土師清二
監督 石田民三
撮影 高橋則武

オール・トーキー

新興キネマ京都撮影所

自由の天地

松竹大船特作トーキー

清水宏監督作品

源尊澤脚本・青木勇撮影

夏川大二郎主演

近衛敏明　高杉早苗　桑野通子　築地まゆみ　山内光　岩田祐吉　水戸光子　藤野秀夫

——共演——

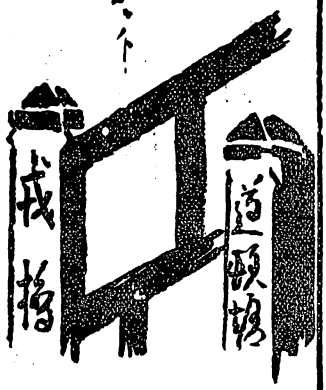
上原謙　特別出演

六月中旬封切

松竹キネマ大阪支店

鰻と鄙料理

川魚料理



柴藤食堂

二階 椅子席

三階 宴會場

電話南 四八一〇 九五二 四八四四

大阪歌舞伎座　東京新派

「根屋の茅」

細木春之進　喜多村

おふみ（元遊女）　河合

1

2

勸進帳

（本誌特寫）

1——珠數さらさと押しもむだり

2——それつら〳〵おもんみれば……

3——その身を不動明王の尊容にかたどるなり

4——方々は何故にかほど賤しき强力を……

3

5

4

グラフ

京都南座

5——勇みかゝれる有様は如何なる天魔鬼神も……

6——恐れつべうぞ見えにける

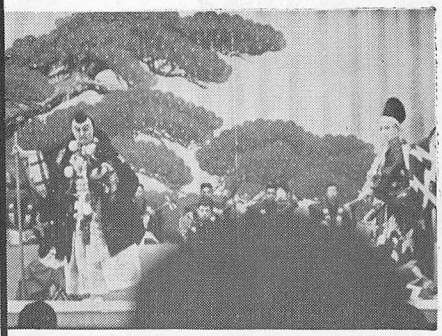
7——判官御手を取り給ひ……

8——荘重な延年の舞

9——幕外揚幕を見込む

10——飛び方法

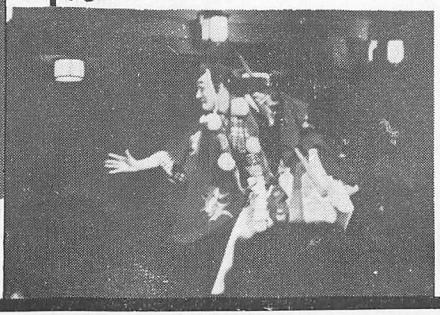
7



6

8

9



10

「明治一代女」お梅　花柳章太郎

レート白粉
つけたと見えぬ
自然の美くしさにつく
レート白粉の
メーク アップ!!
水と粉
白、肌、濃肌
オークルの四種
東京
大阪
平尾賛平商店

茶
西区みなとぱし町
笠立半
電話番町二六三三番

東京大新派劇

狂言は大當り十八番物揃ひ

毎日三時半開幕・初二日目二時半開幕

第一 朝飯 二幕 藤島一虎作 巖谷三一監督

第二 鉈一 昆布豊作 久保田万太郎補綴

第三 片時雨 二場 三好一光作 田島淳舞盛醒春

第四 茅の屋根 一幕 菊池寛作 喜多村緑郎脚色

第五 明治一代女 十五幕 川口松太郎作

◇前賣團体專用電話 (戎) 二八二六—二八二八

初日は各等割引値段

初日割引	
櫻・三十五錢	菊・五十五錢
三等・七十錢	二等・一円
一等・二円七十錢	

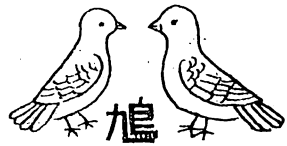
河村合 武田 西脇 成田 高梨 河合 柳英 山田 花山 成島 南井 若 雪岡 木村 喜多 村緑 武式郎 雄部 菊新 俄滋 成雄 堂 永英 二明郎 一石郎 九州太郎 英男 惠夫 信三 一男郎 光一郎 次操郎

小堀 白河 松本 吉川 柳戸 森は 菊波 伊藤 赤井 正之 花大矢 川柳市 松島 花下和 若宮 吉岡 潮戸啓 花柳章 彰誠 青夫 代峰 枝 公乃 る子 赫子 斯寛 次郎 寛章 柳峰 幸誠 里一 大路 英郎 大郎

六月一日初日

歌舞伎座

火阪



ピースシロップ

夏季飲料の王座

最古の歴史と最新の技術に依る

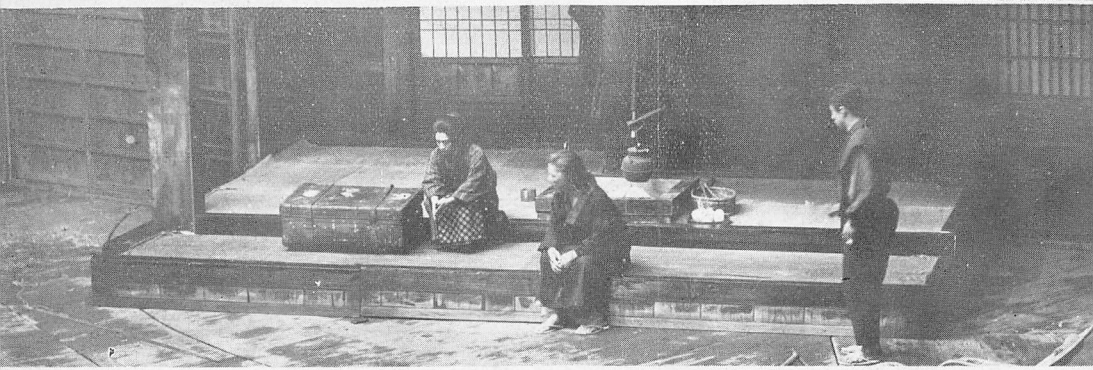
ピースモカコーヒーシロップを

御贈答に

御家庭に

御使用願ひます

KYOTO MANNI & CO



―― 集面臺舞 ――

「女　代　一　治　明」　①

「雨　　時　　片」　②

「　　鉈　　」　③

―― 座伎舞歌 ――

浪花座　栗島すみ子一座

永山の娘照子　栗島・その夫富山　岩永

カユミ止
蚊よけ
チック型
SKI
スキー

毒虫ノ襲來ヲ防ゲ

蚊、蠅、蚤、南京虫、蟻、毛虫

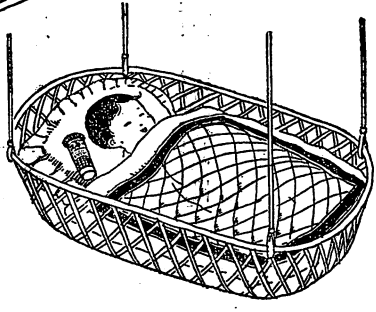
等嫌ナ毒虫モスキーノ使用ニ依テ完全ニ驅逐ス

カユミヲ止メヨ

之等毒虫ノ刺スコトニ依テ起ルカユミヲ即座ニ解消スル新劑ニシテ大人ハ勿論幼兒ト雖モ度々使用スルニ何等皮膚ヲ害セズ又發汗ノ防害ヲモナサズ無脂肪性ナレバ感觸ヨリ佳香ニ富ム且瘙痒部ノ掻傷ニヨリ化膿菌ノ侵入ヲ防ギ皮膚炎ノ豫防ヲナス

價四十錢

蚊や南京虫に攻められて



スキーの御蔭で スヤ〳〵と

製造發賣元 光榮商會

大阪市東區伏見町三丁目二七

電話北濱三三一五番

振替大阪三三一一七番

デパート藥品部・藥店ニ有リ

證券金融

有價證券賣買

株式會社

日本信託銀行

本店　大阪市東區今橋二丁目

支店　東京市日本橋區南茅場町

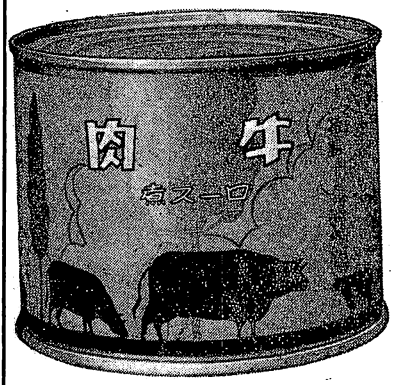
高級パン
和洋菓子
雪印アイスクリーム

京都松竹系劇場
一手販賣

藥學士が監督する理想的製パン工場
大日本製パン工場組合員
日丁堂
電話祇(6)二四一八番

金鶏印罐詰 二大製品

1. 純良精選の牛肉
   で御座います
1. 不意の御來客に
1. 御酒ビールの御友に
1. キャンピングに
1. ハイキングに
1. 各地百貨店
   著名食料品店
   に販賣致して居ります
1. キンケイ印を御指定下さい



洋酒・飲料水・罐詰

株式會社 横山商店

大阪東區豊後町三

關西新派と俳優學校劇團・角座

上

万屋お高　若葉
彌一郎姉お千代　梅野井
飾問屋彌一郎　寺田

下

横川大助　滿田
香島滿子　島田

躍進の文樂六月興行

「新曲連獅子」

雄獅子　三榮

雌獅子　文五郎

アトラクションメトーハデの樂娯藝演

吉本移動演藝の御利用を！

これは皆様の餘興の相談所です

餘興の御豫約はお早く!!

凡ゆる演藝娯樂の豊富を誇る弊社が、人氣と笑讃を博してゐる專屬技藝員を皆様の御希望に應じ移動演藝として派遣いたします。大衆的なもの、高尚なもの、多種多様文字通り笑ひと興趣つきぬ多彩の内容で例へば落語、漫才の一人或は二人の演藝種目から十數人數十人の一座に至るまでの御希望の陣容で御指定の日時場所へ出演いたします。

こんな場合

官衙、學校の催しに、記念運動會又は歡迎歡送の催しや集會、結婚其他の披露宴から一般の宴會、宴席等々、演藝のデバントメントストア吉本の移動演藝の御利用で愉快に面白く一層意義ある催しになります。尚商店、會社の宣傳法として、演劇、演藝とのタイアップを御希望の際は、小劇團から大一座の編成を御相談に應じます。

演藝種目

落語・漫才・漫談・奇術・音曲
漫藝・歌踊・日本舞踊・
レヴュー・新舞踊・喜劇・劍戟
ジャズ・民謡・曲技・寸劇
モダーン・コメディ・歌舞伎
等々他諸藝何でも網羅してゐます。

派遣費低廉・指定の日時場所へ出演
遣費低廉・指定の日時場所へ出演
びに及び戸神・都京・阪大演京東
と座一・もてへこど濱横
し方地回巡も應需すまし。

御申込みは

吉本興業合名會社の移動演藝部へ

大阪市南區東清水町三〇
電話南㊤ 四七八八番 〇九五一番

京都は—本局六〇四三番(新京極花月劇場内) 本局二〇三三番(新京極富貴内)
神戸は—湊川三〇四九番(新開地多聞座内)
東京は—九段三四六六番(東京支社) 根岸一九五一番(昭和座内)
横濱は—長者町一三一番(花月内) 長者町三七九番(朝日座内)

大阪市外

（大軌上六より十六分）

大阪競馬

七月
一日（水）
二日（木）
四日（土）
五日（日）

（昭和十二年）

（雨天順延）

尾

八

月刊・演劇研究・雜誌

演藝畫報

第十一年

六月號

第百十七輯

—壇原多助—
娘お花　中村芳子

作談三輯

友禪のこと

岡本綺堂

拙作「京の友禪」は大正六年三月の明治座初演で、その當時の役割は友七の左團次、お京の松蔦、百右衛門の八百藏（後の中車）おいよの我童（後の仁左衛門）等でした。左團次は初演ぎりですが、その後に壽美藏が再三上演、現に昨年も寶塚で上演しましたほかにも新之助等が屢々上演私の作中では上演回數の多い方です。友禪染などを主題にして、舞臺面が美しいせゐでせう。

友禪染は誰も知つてゐるのですが、それを創めた友禪といふ人物に就ては餘り詳しく知られてゐません。友禪は京都の人で、姓を宮崎氏といひ有名な染物職人で、繪をも巧みに描いたので、彼の友禪染のやうな華麗な染物を案出して大いに世に行はれ、晩年は加賀の金澤に移つたと傳へられてゐます。

また一説によると、友禪は職人ではなく、繪を描く僧、いはゆる繪法師で、最初は扇面や衣裳に肉筆で描いたのが都の女たちに賞美せられ、肉筆ではなか〳〵間に合はないので、その下繪によつて染めることになつた。故に呼んで友禪染といふ。以上の二説、いづれが正しいか判りませんが祇園の梶女の歌集「梶の葉集

「に友禪の筆が殘つてゐて、元祿時代の人であると云ふだけは確なやうです。昔も今も友禪といへば、世に美しい物の代表のやうに持囃されてゐながら、その創始者の經歷が明かでないのは遺憾です。

そこで、私は何とかして此の友禪を劇化してみたいと思ひ立つたのですが、前にいふ通りの次第で友禪その人の經歷が判然しない。勿論、劇的の傳說などもない。何か友禪について逸話のやうな物でもないかと、心あたりを聞き合せてみましたが、彼の「梶の葉集」以外には殆ど雲を摑むやうなわけでした。結局、一切を私の空想で書くの外はないと決心したのです。

さうなると、唯一の手がかりは梶女で、これも有名な婦人ですから、友禪と梶女、即ち繪法師と女流歌人の組合せで、なんとか面白い芝居が出來さうに思はれたのですが、扨かんがへて見ると、二十年前の私には何うも好い工夫が浮びませんでした。

そのうちに不圖思ひ附いたのは、ユーゴーの小說トイラース・オブ・ザ・シー（海の勞働者）でした。御承知の通り、この小說の主人公ギリアツトは船乘りで、繪のことなどには何の關係もないのですが、その最後にギリアツトが自分の戀してゐるデスデモナといふ娘に嫁入衣裳をあたへる。その衣裳はギリアツトの母が我子の嫁とする女に遺る積りで、かねて拵へてあつた物であるといふ。その一節が面白く思はれたので、それからヒントを得てこの芝居を組立てることにしました。もちろん原作とは筋が違つてゐますが、兎も角も友七の失戀と嫁入衣裳と、この二つの事件はギリアツトの借物です。

この芝居は一幕物で、友七が髮を切つて友禪となるまでに終つてゐますが、繪法師となつてからも未だ書くことが有りそうです。お京やおいよの後日にも劇的材料がありさうなので、そのうちに續編を書かうと思ひながら、いつか二十年の月日が過ぎてしまひました。この作談をかきながらも、今さら自分の老に驚いてゐる次第です。

「空想部落」
作者と私の因緣話

寺田　鼎

今から十七年ばかり前のこと、芝の金杉橋の近くに旭舘といふ下宿屋があつて、その二階の六疊だつたか八疊か

に眉目秀麗の青年が泊つてゐた。そのころ交際し始めた少年が、或る日その部屋に這入つてみると、その青年は生憎と不在で、机が二つ——何故二つだつたか、今もつて分らない——置いてあつた。そして机の上には原稿用紙が行儀よく並べてあつて、その上に小さい本が載せてあつた。

「もう直ぐお歸りになりますからお待ちなさい」と云はれてゐた少年は、退屈まぎれについ、その小さい本をひゐげてみた。そして忽ち、さつと顏をあからめた。

その本は春畫帳だつたのである。少年は、然し、息をはづませてその本を終りまで見た。それから悪い事でもしたやうに、その本を元の通りに置いて、そゝくさと歸つてしまつた。青年の歸りを待たなかつたのは云ふまでもない。

その青年といふのは、そのころ早くも原稿が賣れるやうになつてゐた尾崎士郎氏であり、少年といふのは、其處で思想問題を論じたり、文學の話を聞きに行く寺田鼎氏であつた。

▲

尾崎君が小說を書くやうになつたのは、それから數年後のことである。しかもその小說たるや所謂純文藝であつて世間一般に波布すべく、可なりむつかしいので、わたしはあまり讀まなかつた。そしてわたしは、原稿かきに緣遠い生活に這入つた。

數年後、尾崎にすゝめられて、共著でチャップリンに關する本を書く事になつた。その本は山本有三氏などが非常に推賞してくれた（その手紙はまだ保存してある）立派なものではあるが、その中幾分かは尾崎とわたしとの合作の創作になつてゐるんだから笑はせる。しかも、チャップリンの傳記を二人で創作したのであるから、正直に云ふと二人共いゝかげん與太であつた

そればかりでなく、チャップリンの文章をわたしが飜譯して置くと、例へば「朝は床の中で妄想に耽つた」とあるべきところが、校正刷りになつて來たのを見ると、「朝は床の中で性的妄想に耽つた」となつてゐたから驚いた。

「これは怎したんだらう？」といふと、「僕が書き込んだんだ。さうした方が面白いだらう」と云つて、尾崎はケロリとしてゐた。

まづ、かう云つた調子が半分位まじつてゐるチャップリンだ。

▲

尾崎士郎の小說の中で、最も洛陽の紙價を高からしめたものは「人生劇場」であつたその映畫はまた非常な世の喝采を博した。

「あれを脚色したいんだが……」とわたしが持ちかけた時、尾崎はそれを拒絕した。それには、いろんな事情があ

つた。（それは書かない）

わたしは、それでは『空想部落』を」と云ふと、

「もちろん、君に優先權をやるよ」と云つた。そして追加して曰く、

「その代りね、あれはウンと面白く脚色してもらひたいんだ。二人でチャツプリンを書いた時みたいな調子で、うんと與太つてもらひたいね」と。

▲

小說「空想部落」は、簡單に云へば大森に近い馬込村（小說では牛追村）の文士や、文學青年を中心とする「文壇嘘つき村」に外ならぬ。しかも、登場人物にはそれ〴〵モデルがある。

就中、横川大助なる人物のモデルに至つては、「チャツプリン」執筆當時から尾崎とも、わたしとも交渉があつたので、尾崎は小說にするのに書きやすかつたに相違ないがわたしは少し困却した。小說に書かれない部分に人間の面白味も可なりあつたが、わたしは小說の大助ほどの性格の發展を許さないで脚色した。

第三幕に至つては、小說と殆ど離れて、芝居ではグツと面白くなつてしまふが、これは尾崎にすゝめられたわたしの「與太」である。

小說のに中は脚色の出來るものと、出來ないものとがある。「空想部落」は、その執れに屬するかは別だ。わたしには脚色出來る小說と思はれたし、わたしが脚色した結果は、舞臺でごらんになる通りのものである。わたしとしては、見物が面白がつてくれゝばいゝのであつて、脚色者としては、これ以上何にも云ふ事はない。

涙の多助

大槻たもつ

行くも涙、送るも涙、涙々の洪水で足がすべつて別れが鈍る正に風水害以上。

非常時籠釣瓶

大槻たもつ

「アレマア次郎さん、機關銃なんかでお打ちだとわちきの顔がお主の樣になりすぞェ。」

戀扇に就て

食満南北

「戀扇」
何でしたかね？
ハ、ン中座の所作の事ですか、あれはね、何でもないのですよ、狂言の「附子」からとつて、かつては
「戀巴」
といふ名題で書卸し、其のの、
「新年の何？」
とかかへて又出し、東京でも若手の連中がやつたのですよ。
「三人片輪」
でもないといふ時よくひきあひに出される所作で、賑やかなと云ふのと、女形がからんで色氣があるといふので、會社側でたび〳〵案にのぼるのです、さて、私にしては
「戀巴」でも「戀扇」でも「戀柴」でも何でもよいのです。
所作なんて云ふものは、振附がよくつて、作曲がうまくつて、演者が上手ならよいので、原作なんか本當にかべの下ぬりですよ。近頃私はだん〳〵自信と云つたやうな持合せがなくなつて行くので、ただもう〳〵
「お金がほしい〳〵」
の一方で、
「お金」
にさへなるなら、實際命令にフクジュして何でも描きますよ。しかし其處に
「面白いもの」
といふことだけは心がけてゐるので、
「タイクツなもの」
はさけたいと思ふてゐます
近頃私自身が
「タイクツなもの」
を視るのもいやなので勢、タイクツしないものと云ふのをモートーにしてゐます。
「名作」
などはとても出來る筈がないのだからせめて
「タイクツしない芝居」
といふ心掛で進でゐるのです
ついでながら文樂の爲に
「鞘當」
を描たのですが、之も無論
「タイクツしない一幕」
と心がけたまでです。
私のうちから眞向かふの別莊風の家の表の塀がイヤな色で、イヤなものでしたが、昨今スツカリぬりかへ趣をかへてくれたので私の家の私の書齋からは全く、心持がよくなつて見違へるやうになつたのです、無論向ふのうちの人には解らないのでつまり見物の爲にぬりかへてくれたのです
「戀巴」を「戀扇」にぬりかへたのもこんな心持でやつて見たまでです。
何だかつまらないことを云つてしまひました。
（昭和十一、五、二四稿）

多助のこと

中村魁車

○御質問の六月興行の私の持役の鹽原多助は今度在來の經濟鑑でなく時代に相應した人物に書卸した所謂新作ものです 從て初役ですから未成品なのです。

○種々とそのモデルの人物を現代の人より得ようと苦心している次第です。

○御期待に副ふよふに懸命の努力をいたす考えです。

★ ★ ★

僕の持役

笈川武夫

からりと晴れた日曜の朝、ラヂオが——ションション證城寺證城寺の庭は——。泡田君はサラリーマンだ。泡田君の毎朝は眠むたい。だからドンタクは尙眠むい。飯を濟して、新聞を擴げて、煙草をふかして、ひぢ枕で、つまりのびてゐるのである「あなた！」と妻君が呼ぶ。「なんだい」と答える。けれど二人は若くない。結婚三年！後は言へない事もないし、忘れちや嫌よ、てなこともない。

妻は昨日昔の友達に會つて來た。お友達の亭主は職工——と言つて輕蔑しちやいけない。彼氏は元氣がいゝ、張りがある。そして何よりも女房を可愛がる。其の證據には女房をなぐる、變態ではない！ 野球が盛んで、ラグビーが華やかで、角力が更生して、拳闘が耐らない世の中だ。愛情も亦宜しくボエーンと行くべしである。

だのに——泡田君は、判つてるのか判らないのか、怒つてるのか泣いてるのか、眠つてるのか起きてるのか、生きてるのか死んでるのか——妻君は洗濯をしながら考へては腹が立つ。いや、腹が立つ。が、待てしばし——鼻毛を拔き乍ら、泡田君も考へてゐる。——どうかして課長のお氣に入り、主任に取入り支配人に認められて、せめて會計課の次長になりたいものと。

龜屋原德氏作る「夫婦訓」さて上手く實感が出ますかしら。

★ ★ ★

日本俳優學校の人々

菱田正男

菊五郎が「日本俳優學校」をこしらへてから、もう相當になる。

最初「役者の學校」といつたヘンな眼で見られたこの學校も、もう一つの劇團を劇界へ送り出すやうになつた、六代目が自分の藝の完成するのと同樣に隨分はげしい稽古をつゞけて生徒連を養成してゐることは屢々耳にしてゐた。

だが、これらの薫育された生徒連の將來は果してどうなるのだらうか——といふことは少なくとも芝居に關心を持つ人々の誰もが考へたことだつた、一つの劇團としてこれらの人々が巣立ちした時、「待つてゐました」とばかり快よく迎へてくれる興行師——劇場は果してどうだか——といふことを考へる時、徒らに失業時代の大きな不安がこゝにも襲ふのではないかと案じられて、自分らも他人事ながら、その前途にすくな

日本俳優學校生徒諸君を迎へるに際して

私達の劇團は、創立以來早くも三年目の夏を迎へんとしてゐます。

勿論、私達は徒らに劇團の存續したことを以て喜びとするものではありません。私達の希ふところは、劇團の正しき發展にあるのであります。先年京都南座出演中に產聲を擧げた、C、C倶樂部はその精神の現はれなのであります。

けれどC、C倶樂部は、未だ何等言ふ程の仕事を爲してはゐませんが、然しC、C倶樂部の生れた事が既に一の事實として、私達の體の中に責任とな

からず不安と、興味の錯綜したものを感ぜずにはゐられなかつた。

東京における幾回かの公演のいろんな新聞の批評も讀んで見たが、そこにも期せずして前途にかすかながらも不安、危惧を感じてゐるのが認められた。

「俳優學校の人々よ！　何處へ行く」こんな極めて月並な文字を思ひ出さずにゐられないやうな氣持がした。

それが昨年十二月はじめて關西へお目見得した、しかも六代目をはじめ、友右衛門、三津五郎らの長老連と合同してではあつたが、あの大阪歌舞伎座の大きな舞臺に出演したのだ、東京以外の劇場にいつ現はれるであらうかと思つてゐた自分は早速見物せずにはゐられなかつた。

そしてそこに大きな安心と、將來への期待をあらためて持つたのである。

それはあまりにも俳優學校の人々が眞面目で、熱心で、芝居がうまかつたからである、もちろん校長である菊五郎の藝の反映であり、その人の薫陶よろしきを得てゐるのはいふまでもないことだし、またこんな名優に直接手をとつて教へてもらつてゐるほどの者だから「巧かつたつてあたりまへだ」といつてしまへばそれまでだが、相當に味を出した「靈驗」も「馬泥棒」とゝもに好評だつたのは全く大手柄だつた、もつともこの二つの芝居によつてはじめ俳優學校を見た位ではこの劇團のすべてを知つたやうに書くのは早計だし、今後を見た上で何とか書くのが當然

り、義務となつて宿つてゐます。

今私達は其のC、C倶樂部の精神を以て、地方公演を終へ三ヶ月振りの大阪に歸らうとしてゐます。たま〳〵此時期に當つて日本俳優學校生徒諸君を迎へることを得たのは非常な喜びとするところであります。

俳優學校生徒諸君が斯界の權威者である尾上菊五郎氏初め多くの優れた方々に依つて、藝術創造の基礎的訓練を受け立派にその過程を修めて來られたことは、既に周知のことであります。

此際、この榮譽ある俳優學校生徒諸君と共に、親しく舞臺に立つことを、單なる交誼に留めず藝術精神の昂揚を計る意味に於て、私達C、C倶樂部員

なのだが、雨後の筍のやうに發生してゐる素人劇團などとテンデ違ふところが歴然と見えたのは何といつても嬉しいことだつた、この調子だつたら、必らず惚れ込んだ誰かによつて抱へられ、劇場をあてがはれるのではないかといつた空想めいた考へを持つても見たのである。

その後、新聞に〃日大との合併〃が傳へられた、これもさつき書いた立場からさもあらうとは考へられた——すると間もなく六代目がお冠りでこの話がオヂャンになつたことを聞いた、これも尤もだと思つた——つまり俳優學校が可愛いければこそ六代目も日大との合併を承知したのだらうし、又その間におもしろくないことがあつて、この劇團をいゝものにしたい念願なればこそ交渉が決裂したのだらうから……このことはどつちになつた方がこの劇團のためだかは第二段として、とにかくウンと伸びて行つてくれることを祈りたい。

それへまた入つたニュースでは、こんど大阪角座に六代目から離れて都築、梅野井らの關西新派劇の連中と合同出演するとのことが發表された、最初は俳優學校劇團だけの獨立公演だと聞いたので、現在の興行政策上どうかと思つたが、新派連と一緒ならまづわるくはあるまいと思ふ尾崎士郎氏の「空想部落」を演るとかいふが、何でもいゝからドシ〳〵いろんなものを手がけてウンと腕をみがくこと。

こんどの公演に際して、校長の六代目が新聞を通じての言葉に「今回はからずも御當地に參り、獨立第一回の公演を開いていたゞくことは、茲に熱誠と歡喜を以て俳優學校生徒諸君を迎へるものであります。

六月一日

關西新派劇團
C・O倶樂部

世話人 畑 穰
星 四郎
笈川武夫
景山言兵衛
吉田正雄
高屋貞澄
都築文男
梅野井秀男
寺田靖夫

關西新派劇團
俳優學校劇團

十六日より
二の替り

角座六月公演

とになりましたが、親元を離れますことは、幾つになりましても、一人旅のいたいけなさを感じますが、新らしい國劇樹立を目指して、正しく、明るく、大きく、強く、藝道を踏みしめて行こうとする團員の同き決心に旅も修業と存じました」云々

とある、この校長の言葉そのまゝを行はうとする劇團の諸君達はこれを好機に出來れば道頓堀に長く根をおろして、勉強し、天晴れ校長の名を恥かしめぬやうにベストを盡すことが肝腎だ。（昭十一、五、廿四）

本誌の月極め御講讀をおすゝめ致します。

一ケ年　3圓30錢

編輯部宛お申込を……

ソリウタオネけに　核結

淋病にはコナイン

…花柳病科…

藤原医院

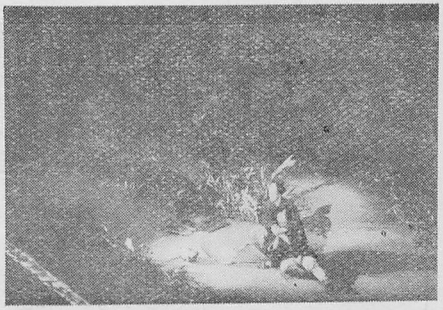
★ 番六三六二戎話電　入西側ノ溝筋橋戎

淋病にはコナイン

ソリウタオネけに　核結

塩原多助經濟鑑

中座六月上演



◆

青よ、われとは久しい馴染であつたなア。

——かぞへて見れば十四年跡、われが死んだお父様に買はれて來る時、俺も八ツで養子となりわれの背中に乘せられて、下新田に來て以來、一ツに育ちやア畜生だとて兄弟も同じ事、よくけふが日まで塩原の家のために勤めてくれた、そのワレ故に段々と齡を取るに從つて樂をさせてやんべいと思つて居たゞが、それも今ぢやア出來なくなつたゞ、思へば今夜どうしても、ワレが歩かねえばつかりに円次どんの此の災難、とは云へワレと円次どんは俺らのためには命の親、有難え、添けねえ。コレ——円次郎どん、俺ア是れから江戸へ出て命のかぎり働いた上たとへ塩原の家は潰されようと我が手で再興の出來る樣、金を貯めて歸つて來るだ、その上でお父様の法事と共におめへの菩提を葬らふだらうから、どうぞ迷はず往生して下さへやし、えゝ、えゝ……

青よ、ワレも泣いて居るか、

——あゝ畜生でさへ情を知り、名殘りを惜んで泣いてくれるに人間の皮を着ながら現在の實の甥なり、從兄なり、聟や亭主でありながら、殺さうとは何事だんべい。——あゝ何時まで居たとて名殘りア盡きねえ、それぢやア青よ、達者で居ろよ。——円次どん俺らア行くだよ、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

青よ、さ、さらばだ。

◆

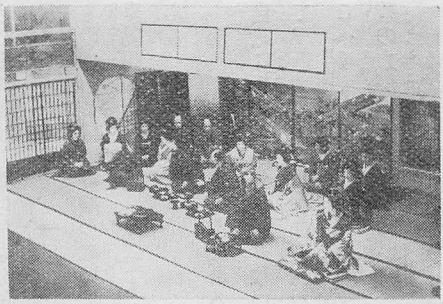
明治チヨコレート

優れた味と豐富な榮養を持つ近代人齋しく愛好の食品

明治製菓株式會社

籠釣瓶花街醉醒

中座六月上演



治郎左　花魁、ソリヤアちつとつれなからうぜ。

夜毎にかはる枕のかず、浮川竹のつとめの身ではきのふにまさるけふ花と、心がはりがしたかは知らぬが、もう表向き今夜にも身受けのことを取極めやうと、夕べも宿で寢もやらず、秋の夜長をまちかねて、菊見がてらの廓の露、ぬれて見たさに來て見れば、案に相違の愛想づかし、ソリヤ田舍者のその上に、二タ目と見られぬわしゆへに、斷はられても仕方がないが、ナゼ初手からさうは云つてくれぬぞ江戸へ來る度吉原で、佐野の誰とか噂さもあれ、二階へ來れば朋輩の、花魁衆や禿にまで、名を呼ばるゝ程になつてから、ドウ指をくわへて引込まれうぞ、こゝの道理を聞きわけて察してくれてもよいではないか。

八ツ橋　ソリヤぬしが足を近くしげ〳〵ここへ來なます故、名もしられたのでありんす、耻をかくのも當り前、お氣の毒だがお心柄わたしのせいぢやアありんせん。

治郎左　フム、スリヤそれ程に

治郎左衛門を。

八ツ橋　人騷がせに身受けをされて、それからお斷りもお氣の毒、さきへ云ふのはこつちの達引、こゝらは實にありんすのさ。

治郎左　ハア、それぢやアさつき廊下で逢つを二人連れの客人は、八ツ橋おぬしの間夫であつたか。

◆　◆

中座六月上演——

籠釣瓶について

辻田公紀

岡本綺堂さんが左團次のために書き直した籠釣瓶は、專ら左團次向きに書きこなされてあるので、一寸他の手の出ないものであつて譬令演つて見てもさのみ舞臺効果のあるべきものでもなさそうである。

他優が替つても爾うであるが左團次君自身にも餘り演榮えのせないものと見えて、近頃頓と上演されないものだが、爾こへゆくと河竹新七が書た籠釣瓶花街醉醒の方が舞臺價値が多いやうである。

最も之も先代の左團次に書卸されたものであつて、從來から吉原の百人斬を取扱つた色々の狂言の中、全然其筋のみを切り離して脚色された紫花色吉原から醇色されたものであることは論を俟たない。

今の左團次に書た籠釣瓶は、其工作、意氣が勃興時代の左團次の舞臺に最も嵌合した、寧ろ迎合した脚色であつて、脚本を讀んだゞけでも誰にでも嵌つてゆくものではない、併も近頃の左團次は、曩年の如き純單調な舞臺味を捨て、幾分技巧的なしぐさを撰ぶやうになつてゐるから、隨つて當代の綺堂ものには少々慊らない氣持ちにもなつてゐるのであろう。

斯樣になつてくると先代のために書きこなされた籠釣瓶花街醉醒が獨り吉右衛門ものとしてのみの存在でも無かりそうな機運が來はせぬか。

併しながら吉右衛門の如く深刻な熱を以て舞臺を盛り上げてゐる優には、慥かに此花街醉醒の佐野次郎左衛門の方が深みがある、假りに播磨家が綺堂さんの次郎左衛門を演つても、迚も左團次ほどの舞臺効果は上ら無かろうと想像される。

颯爽とした、無技巧な、一本調子の舞臺を持つ左團次には、最も綺堂さんの籠釣瓶が適してゐるだろう、無際限に舞臺巾を廣ふして、幕が閉つても芝居をしてゐる吉右衛門には、何うしても花街醉醒の籠釣瓶でないと納まるまい。

そして彼の浪人繁山榮之丞……綺堂さんのでは寶生榮之丞……の取扱方が、花

街醉醒では單なる八ツ橋の情人として輕く取扱はれてゐるが、綺堂さんの方では最初から榮之亟が絡んで立派な色立役になつてゐる、之は增田家のゐた時分、それに嵌めて活用されたものと思ふが、それだけに次郎左衛門の品が低下してゆく例へば榮之亟の許へ八ツ橋身請の一件を頼みに行くなど、色敵と知つて頼みに行くのだから、或は深刻味を盛り上げる手段にもせよ、榮之亟が科白の如く、元は野州の長脇差で何麼ことをするか知れたものでないやうな、底氣味の悪い男振りでもなさそうなやうにも見える。

爾こへ行くと單的に八ツ橋の情人として強い迫心を持つて、眞一文字に八ツ橋に迫つてゆく純情は寧ろ花街醉醒に濃厚に現はされてゐる、彼の八ツ橋の愛憎づかしに『花魁そりやちとつれなかろうぜ……』云々の怨言などは頗る深刻で藝術的味はひが漂溢してゐる。

花魁を斬つた刀を見上げて『籠釣瓶は好く斬れるな……』邊りは實に凄慘なほど鬼氣に迫つて、吉右衛門の舞臺面は最高潮した場面である。

併し左團次の方へ行くと其花魁斬りは見せず唯人々の科白だけで利かそうとするのは其筋の五月蠅い干渉を避けやうとする用意かも知れないが、それだけ看客の目移りに對する深刻さが稀薄になつて此種の演技には尠なからず不利益である

そして梯子を持ち出して講談の吉原の百人斬を偲ばしめる抔、聊か大手の決戰を搦手から見てゐるやうな恰好である。

最も綺堂さんの此時代し、河竹新七の時代とは、劇其物の鑑賞眼も變つてゐるやうし、隨つて演技者の理想も違つてゐるからそうした相違も起つてくるのだろうと思ふが、芝居を觀るといふ概念から行くと、矢張り芝居らしいのを見てゐる方が氣持ちが好いのであるから、兎に角無技巧式の淡白な舞臺より、幾分濃情な舞臺の方が俳優も演良かろうし、看客も見良といふ事になりはしないだろうか。

此意味に於て吉右衛門の演ずる籠釣瓶花街醉醒の方が芝居らしくて觀客は堪能するだろうと思はれると共に、綺堂さんの籠釣瓶は何だか漬物で茶漬けを喰ふてゐるやうな感じがする。

茲で別に左團次がいけないといふのでもない、吉右衛門が良いといふ譯でもない……が、籠釣瓶の舞臺を見るに就て矢張り淡彩のものより、極色彩の方が芝居らしくて良かろうと思ふのである。

隨つて綺堂さんの籠釣瓶を今更爰で彼れ是れ批評したのでも何でもない、唯漫然と籠釣瓶に就て何か書けといふことであつたから、同じ籠釣瓶を比較して見たゞけで、自然作者や演者に對しても何物の批評を試みた譯でもないのだから、その點だけを爰にお斷はりして置く。

型の研究・其の三

勸進帳「辨慶の型」

―その二―

編輯部編

『いかにも』
『心得て候』

〈元より勸進帳のあらばこそ……

……讀み上げけれ

思入れの後一寸珠數を摩つて解き左に持ち左の足から右へ廻り奥へ行く。

左の手に珠數、卷物を握つてゐる右の手を斜に後へ引いて頭より少し上げた形で下手より上手へ廻る樣に前へ出で正面に直り左の珠數を手首へ掛け兩手で卷物を頂き、卷物の開き初めへ紐を解いて卷付け開き乍ら一方を卷込んで順に卷物を開くと同時に足を半開きにして極る。

『それつらつらおもん見れば……

低く引いて重く謠の如く云ふ。この臺詞の間に富樫は忍足に近づき卷物を覗き込まうとする。

辨慶はフト富樫の方へ眼をやり左の足をトンと踏んで右足を引くと同時に右へ卷物を引き斜に下げ、左の手は右の乳のあたりに付けて首だけで富樫と振り返へる心で上手を見上げた見得にて極る。後、辨慶は次第に右の手を下げると同時に左の足から圓くすり寄り富樫の方を向き乍ら卷物を富樫から見えぬ樣に兩

……大恩教主の秋の月は……
……人もなし……
……聖武皇帝を……
……敬つて白す』
〽天も響けと讀み上げたり

『その由來いと易し……』
『腰には彌陀の……
……大地を突いて……』
『事もおろかや金剛杖は……
……』

手を前へ出して構へ、斜に東の棧敷三の邊り見をる心で極ると富樫は下手に向き直る。
調子を張る。
敬々しく頭を下げる。
大音聲に張つて云ふ。
卷物を富樫に見せぬ樣、右を下に下げ斜下手向きとなり卷戻し同じ位置で紐を結び、右手で堅に持ち、肱を引いて右の乳の邊りに構え、左の手首の珠數を掌へ下して矢張り肱を引いて左の乳の邊に構え、「上げたり」一パイにきまる。(不動の見得)
珠數の手のみ下へ下げる。
一寸腰を見る心。
卷物の手を金剛杖の心で突く。
足を割つてジリジリと富樫へ摺足をして詰寄つて向ひ合ひとなつて束に立ち、また摺り乍ら表向きとなつて束に立つ。この時

『九字眞言……何の難き事やあらん』
『不動明王の尊容にかたどるなり』
『九會曼陀羅のかきの篠掛』
『踏む心なり』
『呵吒の二字』
『九字は大事の神秘にして……
……說き聞かせ申すべし
……莫耶の劍も何んど如かん……
……廣大無量なり……
……云々斯くの通り』
〽感心してぞ見えにける

『わがひが目……』
……布施物持て』

富樫も同じく辨慶に詰寄る。
嘲ける心持で云ふ。
正面に直り前の不動の型となる
體を見る心。
下を見る心。
大きく十分に力を入れて云ふ。
向ひ合ひとなる。
正面に直る。
向ひ合ひとなり大きく張つて云ふ。
大きく云ふ。
十分調子を張つて大きく云ふ。
卷物の手は卷物を横に持つて甲を上にし、頭より稍高く右の方へ伸し、左の手は甲を見せて珠數を下げた儘前へ出し、體を引いた右足へ持たせた市川流の元祿見得で極る。
形を元に直して束に立つ。
後見座へ行く。

〻士卒が運ぶ廣臺に……

『こは有難の大旦那……なんの疑ひあるべからず……

……卯月……

……品々お預け申す……』

左手に珠數を下げて持ち右に中啓を持つた能のかまへで下手から廻る樣に摺足で上手へ出、富樫と向ひ合ふ。

中啓を懷へ挿し、珠數を兩手へ掛けて合せて拜みサラリと上へ跳ねて、再び中啓を持つた元の形となる。

一寸考へる心持で云ふ。

又中啓を懷に挿し、珠數を左手にかけ右の足を下げて膝で坐り砂金と鏡の袋を兩手に持つて乳の處に當てゝ立上り、下手に行き龜井に渡す。

〻こは嬉しやと山伏も……

『……止まれとこそ』

『慌てゝ事を仕損ずな』

〻すはや我君怪しむるは……

辨慶富樫と向ひ合ひ、挨拶をして花道にかゝる。

振返つて左の手を開いて前へ出しウォーと聲を懸け乍ら花道の附際まで戻り、

左手を開いたまゝ押返へす形。

その形で富樫の方へ首を向けた後、足早やに義經の後を通つて本舞臺に戻り、義經の左へ下手向きに立つて

早口に云ふ。

『何とて通りおらぬぞ』

『ウム腹立や……

……笈一ツ……

……跡に下ればこそ……

……人も怪むれ……

……己の仕業……

……憎くし憎くし……

……いでもの見せん』

〻金剛杖をおつ取つて、さん〳〵に打擲す。

『通れ

〻通れとこそは罵りぬ

體全體を二三度搖る。

笈を見る。

中啓で下る形をする。

向を見る。

中啓で義經を指す。

再び體全體を搖る。

大きく云ひ、中啓を懷中にす。

義經の肩に當てかつてゐる金剛杖を手荒に取り、足を割つて右手を高く、左手を低く杖を振り上げ、笠の前を一ツ、後を一ツ又前を一ツ打下す。

大きく云ふ。

金剛杖を右手でトンと突き、右足をトンと踏み、金剛杖を横に振り右の肩から大きく横へ伸した形で束になつて極る。

（以下次號）

—參考書—

『歌舞伎』　六七　一六七

●連獅子作曲のこと●

鶴澤道八

六月の文樂座中幕に上演致します連獅子につきましてお話致します。

去る昨年二十三日不肖道八不慮の災難にて嫌疑を受け警察に留置の身上となり日夜のお調べはもとよりおぼえのないことお上の御質問に答へ十日間程は隨分となやみました。

ところで餘談に移りますが私は鶯を愛飼しております。ひなの頃より手しほにかけ餌を與へ育て上げ毎年十月の末より愛鳥に燈を入れ十二月には美はしい初こゑを上げて私の心を慰めて呉れます。

この鶯が美しい聲でさえづるのも藝。あの小さなかごの中を大天地と心得てうたいつゞけて呉れますことを思ひ出し、自分も今とらはれの身の上となつて身は留置場にあると云へども、この中にも大天地であり、其の中には又藝道あり、故人近松門左衛門樣官憲の疑ひをうけられた時入獄致された。其の際かの有名な國戰爺合戰を作せられたと聽いて居ります。私如きものゝとてもおよばぬ事ながらその御遺志をつぎ、歸宅の際には何か新しいものを上演致し藝道を以て舞臺の上より皆樣へ御心配おかけ申したお詫びを致すこそ自分の本分と心づき、それよりあれやこれやと撰びました結果古語に

獅子は我が子を谷へおとしその勢をみるとかや

と申すことを思ひ出し連獅子を撰びました。

御承知の通りこの連獅子は名曲長唄として昔より唄はれて居ります、不肖道八も今社會よりこの浮世の谷そこへけおとされこのくるしき境涯。子獅子の如く勇を奮つて今再び藝道の爲にかけのぼり勉強致したくと存じ、これを撰びました。松竹及び人形吉田榮三氏、吉田文五郎氏、桐竹紋十郎氏の諸氏にも相談この意を申しました所大いに御賛成下さいました。楳茂都陸平先生に振附けをお願ひ致しました。もとより長唄の名曲でありますゆえその名曲を拜借致し義太夫になほし上演致すことゝなりました。

御承知のこの連獅子は雄獅子、雌獅子、子獅子にて初めの程は胡蝶にたはむれ一家團欒の睦じき所をあらはし中程は雄獅子が子獅子を谷へけおとす男性的勇壯な所をあらはし、其の中に雌獅子は充分に母性愛をあらはし後に至つて子獅子の勇をふるいかけ上り來たるを見て、兩親共に喜び親子喜びの舞樂を奏し芽出度く大團結となります。

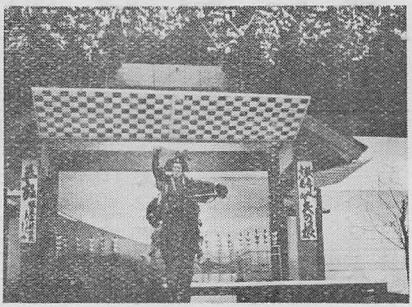
不肖道八如きの腕にも及びもつかぬ事で御座いますが振附の楳茂都陸平先生及び人形吉田榮三氏、吉田文五郎氏、桐竹紋十郎氏の諸氏の御力をかり及ばぬ所をおぎなつて頂くことゝ致しました。

五月東京

三座觀劇記

大橋孝一郎

五月東京の劇壇は歌舞伎に新派に近來にない狂言揃ひで先づ歌舞伎座が先月の大入りに引續いての團菊祭の延長興行で、先月を凌ぐ華かな狂言揃ひ。東京劇場が左團次・猿之助で此の座一流の地味な色どり。明治座が新作本位で河合・喜多村・花柳の三巨頭互ひに技を競ふ等、何れ劣らぬ興趣萬點の膳立に好劇家の血を湧き立たせて何れの劇場も賣り切れ續きの盛況は、先づ以つてめでたしめでたし。



★歌舞伎座（團菊祭）

第一が「矢の根」で三津五郎の五郎は定り型の好さで小柄乍らも立派な五郎だ。曾我の五郎時致が曲馬の程をこれ見よやと大根を振り上げて幕となる恰好の開幕劇である。

第二が「地震加藤」で玄關から奥庭まで。玄關では歌舞伎座の大舞臺に仕懸けられた舞臺裝置のトリックに感歎される。柱や襖がメリメリと物

凄まじい音響を轟かせ噴煙を立て乍らへシ折れて行く。僕の後にゐた婦人が「震災を思ひ出だすわねエ」と囁いてゐたが、東京の人なればげに尤も。碎け落ちた大屋根の破風を破つて吉右衛門の加藤が現れる。何時もの樣に病身らしく形の上では弱々しいが氣魄で見せる清正だ。花道七三に懸つてからゆり返しになつて「なにこれしきの……」とよろめき乍ら揚幕に入るところも巧いものだ。奥庭になつてからの花道つけ際に坐つての述懷は、肺腑を抉る名臺詞を特有の悲痛な名調子で聞かせる。此の長丁場の間本舞臺の人々の行儀のよいのは感心だが、歌右衛門の秀吉が一向に此の役に氣乘り薄の樣に見えたのは心もとない。友右衛門の幸藏主は顔のつくりが若々しかつたが、吉の清正に對して遜色なき好演技であつた。

第三の「すし屋」は申すまでもなき六代目の權太で、最初の出から金をせぶる件り、親父の歸りに驚いてすし桶に金を隱し、正面を見込み乍ら後すざりに暖簾口へ這入つて行く迄のキビキビとした手順の鮮かな運びは敬服すべきだ仁左衛門のお里は蓮葉に過ぎたがそれだけに色氣は十分で此のお里に對して羽左の惟盛が蔭になつてお里を引立てゝゐたのは奥床かしかつた。吉右衛門の梶原は絶品で、此の興行中での菊吉顔合せの數分兩優緊張、正に一觸卽發の息づまる場面で「こやつ小氣味のいゝやつだ」と權太を見下して云ふ處も憎々しい老猾さが充分にじみ出て結構なものだつた。友右衛門は例に依つて彌助に廻つて院本ものゝ人らしく立働いて權太を面白く引立てゝゐる。兎に角當代これ以上の「すし屋」は望めない好配役だ。

第四は「樓門五三桐」で動けない歌右衛門には當を得た出しものだし、役者の貫目を示すのにこれ位華麗で氣の利いた狂言はあるまい。歌右衛門の五右衛門は父芝翫と團十郎との折衷型であり菊五郎の久吉は五代目の型だと聞くが歳のせいか五右衛門の豪快さに乏しい。上下睨み合ふ樣な寫實に走らないのが反つて圖になるのだから古典劇は妙なものである。

第五が「大德寺」燒香場で此處でもまた目も眩ばゆい金ピカの舞臺裝置と數十人の居並ぶ大舞臺に壓倒される。これは羽左の爽かな辯舌と、友右衛門の逆上した熱辯との舌戰劇で、番組に書かれた解說に依ると勝家を勤めた團十郎がその難役を嘆じたとあり、勝家に扮した友右衛門も恐らく團十郎に優るとも劣らない熱演で羽左の秀吉にぶつかつてゐる苦心の程が察しらるゝが、全然動きのない約五十分間はその力量の消耗の割に報ひらるゝところが尠い。而し

羽左と友右衛門の聲調は僕等の耳に良きハアモニーを傳へて呉れた。吉に仁は共に御苦勞。

第六は菊五郎舞踊中での白眉と稱さるゝ「鏡獅子」でその良さに就ては今更贅言を要さゞるところ、前シテの柔、後シテの剛、寸分の隙もない物腰恰好とその氣魄、この一幕だけで東京まで觀劇に來た値打は十分ありと友人が隨喜の涙を流してゐたが無理もない。胡蝶には福助と章景とが踊つてゐたが實に可憐。

第七の「十六夜清心」では羽左衛門が數十回手がけたものだけに變心するあたり枯れ切つた世話物の巧さを見せることは勿論だが、仁左の十六夜が問題でやることなすこと全てお富・三千歳同樣梅幸寫しで演じてはゐるが、梅幸の樣な溫かい情熱を持つ性根が出せないのは尤も仁左天性の性格を責むるが如きもので、こちらが無理かも知れないがそこには又一方、その性格の欠點(此の場合は欠點)をカムフラージュする演出があつて然るべきと思はれるから梅幸寫しの軌道を離れた工夫を見て貰ひたいと思ふのである。羽左が久遠の女房役であつた梅幸を仁左の形に求めてゐる氣持は了解出來るが彼もまた仁左に或る程度の自由な演出の領域を與へる度量を持つて貰ひたいと思ふのである。菊五郎の求女はあの體格でゐてお小姓の演れる藝の力には感心するが見た目にはどうしたつて肥り過ぎてゐる。友右衛門の白蓮は確かに一くせありげな男に見えたのは賞められてよろしく、最後の世話だんまりの數分は羽左のひつ込みの型と共に江戸歌舞伎雰圍氣滿點の舞臺だつた。

第八は歌舞伎十八番「七ツ面」の復刻ものだが面白くも何ともない十八番もので打出しとなる。

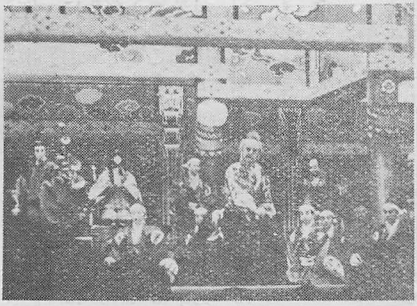
✱東京劇場(左團次・猿之助一座)此處では歌舞伎座のお祭騷ぎをよそに見て不如歸なぞをつゝましく上演してゐるところに左・猿一流の皮肉な方策が伺はれて面白いのだ。

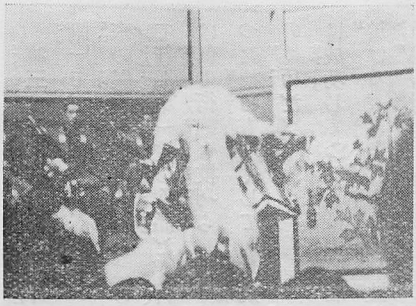
第一の「不如歸」は眞山青果氏の脚色で「定本」と肩書が附されてゐる。「定本」の意味は判らないが全然今迄の型を破つた白紙の氣持で此名作が脚色され、かゝるが故に從來此の種の狂言の難點であつた所謂新派臭からスツカリ拔きん出た仕立上げになつてゐることは、流石に眞山氏の優れた脚色の良さと云へるだらう。その特長を擧ぐるなれば從來の浪子本位の煽情的なるに對して武男本位の心理的な脚色を採つたことゝ、片岡中將に公私の兩難局に惱む人間の息吹きを吹き込むだ點等を擧げ得ると思ふ。而も浪子を中心とする悲劇的な場面をグングン省略して劇を進捗させて行く手法には敬服の外は

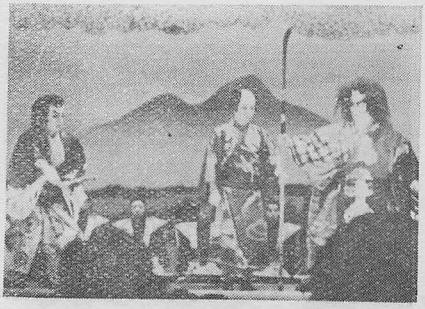
ない。殊に人詰の一幕なぞは片岡中將を主役とした一幕ものとしても立派なもまとまりを持つてゐる。配役では訥子のお慶、八百藏の千々岩、荒次郎の新聞記者等出色で、左團次の片岡中將、猿之助の武男は各々新劇で錬へた腕を見せてゐた。只松蔦の浪子には娘時代のあどけなさは望めず病身になつてからも哀艶さに乏しい怨みがあつた。近頃よく流行る新釋の樣に世界を昭和の時代とせずして、明治時代の風俗のまゝで演じてゐたことも好感が持てた。

第二の「吉野朝太平記」は原作が直木賞の榮冠を得た長篇で、それを僅か一幕三場に書き上げることが既に無理で從つて幾ら左團次・猿之助が力演するとも、此の脚本ではどうにもならないと云ふ退屈な一幕だつた。

第三の「尾上伊太八」は杏花十種の内でも異色ある一篇で岡本綺堂氏の作品に多く見かける感傷癖の稀薄な、どちらかと云へば南北趣味の横溢した作品で、往年南北物に身を入れてゐた左團次がこの作品に魅力を感じたことは豈偶然とは云へない樣だ。今迄數回とはなく同じ配役（但し壽美藏を除く）で手がけられて來たものだけに舞臺の全ては大成の形で、荒み切つた人間に變り果てゝ裏屋住居をする伊太八の演技は、荒次郎の坊主や訥子の丑藏、左升の勘次等の立派なバイプレイヤーに助けられて、よく頽廢的な氣分を釀して遺憾がない。松蔦も「浪子」とは打つて變つた名技で、序幕吉原茶屋場の水の滴るばかりの美しさ、二幕以下の門付おさよになつてか







らの演技、殊に伊太八の樣に坐つて後ろ向きに柱を背にし乍ら瓜引きで唄ふ前後の情緒なぞ印象深い。此の作品は大詰まで救ひのない人生であつて、伊太八の弟が兄に對して武士らしく切腹せよと詰寄るが、作者は伊太八に潔く切腹させる感傷をも此の場合持合せてゐないのである。杏花十種中での異色ある逸品だ。

大喜利の「七人猩々」の所作事は時間の都合で割愛した

★明治座（東京新派）

第一の「夜嵐お絹」は題名から受ける艶美な傳法的な色彩は微塵もなくして、お絹が母性愛に目覺める心境が此の作の主題となつてゐるが全體に迫力に乏しくて中途半ばに終つてゐる。こんな狂言は一層のことあくどい泥繪で見る樣な度ぎつい色彩で仕立た方がいゝのではないか。全體にもつと惡の美しさを強調すべきだつた。

第二の「牝鶏」は井上の「海鳴り」と同樣に花柳の老け役を賣り物にした出しものだが、やることから臺詞の調子まで全てが「海鳴り」調で、その點損をしてゐると云つてよい。然し花柳を始め五人の登場人物は、相當修練を積んだ演技を見せて、あの小劇場風な脚本を巧みに大舞臺でひきしめてゐるのは賞められてよい。

第三は三好一光作の「片時雨」で、これは「二筋道」以來の傑作と稱せらるだけあつて新派第一位の作品だ。脚本は何の衒氣も技巧らしい目立つた技巧もなくして（無技巧の技巧だ）、よく花街の點描に成功してゐる。此の芝居に於ける、喜多村河合の演技は彼等の歩んで來た數十年の舞臺生活から體得したものゝ大集成であり、成果と申してよろしく、絶讃に價ひする。他に大矢のお澄の兄が名技であり、柳の暴力團もよくその役柄を生かしてゐる。殊にお菊に扮する森赫子の進境は目覺しい。幸ひに此の狂言は六月の大阪歌舞伎座で上演さるゝ運びになつてゐるから、是非

好劇家諸賢の御一覽を切望して、檢討されたい。

第四は川口松太郎氏が新たに脚色した泉鏡花の「つや物語」で此の脚本家の器用さを發揮する。花柳の小今は任俠に富んだ江戸ッ子肌の達引に胸のすく樣な芝居を見せる。

——豫定の紙枚に達したので此の邊りで筆を擱く。

舊るき經驗と
卓越せる技術により加工したる
のしするめ
『ウーマイ』
は觀劇の好伴品で
あります

中外物産商會
神戸市兵庫區下澤通二丁目
(川湊三八六三)

中外物産商會出張所
大阪市北區眞砂町三四
(北三九一二)

洋酒界の革命兒國産洋酒の逸品
國産金鶴印
ウキスキー
ブランデー
ベルモット
キユーラソー
ペパーミント
ジン
滋養葡萄酒

元賣發
株式會社 横山商店
大阪市東豐後町三番地
電話東(94)三八六五

我當・扇雀・勘彌・松莚　樂屋で語る

我當君の樂屋で――

――京都はいゝですね。東山一帶の眺望が手に取る樣に樂屋からほしいまゝに出來る、こんな處はメツタに他では味へない良さですね。實に物靜かで、落着きがあつて……

――近頃は新綠で何處へお出懸けになつても氣持がよろしい。ピクニツクは如何です。

――私はピクニツクは大好きです。私の樣な生活をしてゐるものには、健康上是非必要でせう。

――此の月も勸進帳ですね。

――エ、、四月が東京、五月が大阪、六月が京都と名古屋、これぢやア勸進帳の横斷旅行です。

――何處へ行つても關がある譯ですね。

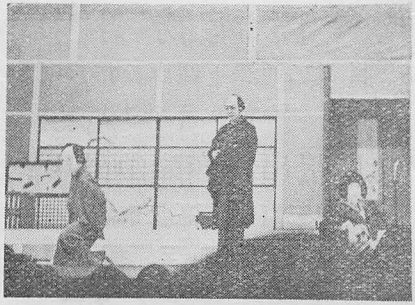
――全く。それに三ヶ月間勸進帳をブツ通しに演つた記錄は恐らく私達が始めてゞせう。私の樣な若輩にこんな大ものが演らして頂けることは役者冥利に餘つた事だと喜んで居りますが、どうも演つてゐることは隙だらけで、迚も皆樣の御滿足を得る樣な辨慶をお目に懸けることは出來ません。

――然し、やれないで何時迄も手を付けづに終へば、何時までたつても駄目でせう

――だから、やれる樣にして演らねばなりません。そして熱意で此の大ものを征服して行く意氣が一ツの藝道への精進だと思ひます。

――辨慶をなさるのには非常な體力が必要でせうね。

――第一が體力ですね。此の月は第一に太閤記が出て光



秀を演つてゐます。この役がまた中々骨の折れる大役で、その後で辨慶を演つたのですから、今日（初日）は非常に草疲れました。

——矢張り幸四郎さんの御指導ですか。

——さうです。幸四郎さんはあんな方ですから何から何まで親切に手を取つて教へて下さいました。それに面白いのは、胃の中に食物のある間は絶對に演れないよと云つて居られましたが、これは眞理でしたね。私はどうしても夜が遲くなるので大てい十一時頃に起床します。それから神樣に參る間がザツト一時間。で丁度十二時に朝食を頂きます。大阪で勸進帳を演つてゐました時は一時四十分の開幕ですから、食事を濟せて一時間位しかない。これで舞臺を勤めましたら、幸四郎さんの御忠告通り果して苦しくなつて大へん困りましたのでお願ひして「梅ごよみ」と狂言を前後して頂きました。

——食後何時間位の狀態がいいのでせう。

——私の經驗では三時間以上は經過してゐなければ、良い狀態と云へませんね。

——山伏問答は如何です。

——あれはね、疊みかけて行くのと、考へ乍ら問答する風と二派ありまして、私のは疊みかける式でやつて居ります。この方が聞く耳ざわりもいゝし、見た目にも面白いと思ひます。

——私は實は今度は少し變つたものを見せて貰ひたかつた……熊谷なぞ……

——私は盛綱が出したかつたのですよ。これは大分私の新解釋がありましてね。是非見て頂きたい狂言なんです。

（我當君此の問に蝙蝠安のメークァップにかゝる）

——オヤ！　蝙蝠の型がバットの空箱で作つてあるのは面白いですね。

——面白いでせう。ゴシップになりますね。

○

扇雀君の部屋で——

——河庄は古くからお演りですか。

——此の狂言は京都とは因緣が深いのです。と云ふのは私の十八の時、京極の歌舞伎座で青年歌舞伎の旗擧興行をやりました時私の出しものに選んだ狂言なのですから……

——隨分古い話ですなア。

——その後京都座や燒けた明治座でも度々やつて參りました。

——何か新らしい工夫をおやりですか。

——此の狂言は御承知の通り亡父が家の藝にまで致しました當り藝で、細かい處にまで十二分な工夫が出來上つてゐますから、私如きが變な工夫や、解釋を加へる餘地がありませんし、變な工夫は反つて、特有の上方の味を損ふ原因ともなると考へますので、全て亡父の型通りでやつて居るのです

——でもどの樣な役でも亡夫の型通りやられる譯ぢやないでせう。

——勿論ですとも。太閤記の十次郎なぞは全部亡父の型から離れた自分の工夫ばかりで演つて居ります。先月の大阪で鎌三を演つた時でもその通りです。この型は私が子供芝居に出てゐた頃色々と古い型を教へて呉れた人があつて、それを覺えてゐたので演つて見ました

——佐々木を呼び出すのに井筒に足を懸けずに横の高い石の上に足を懸けられましたがあれは、貴樣の體を引立たせる爲なのですか？

——イヤ、成る程そうとも思へませうが、あれは矢張り古い型にあるのですよ。

——義經は如何です。

——私は小さな頃に仕舞を教はつてゐましたので足の運びも樂ですし本行に近く演ることが出來ます。どの樣な稽古事でも無駄にはなりませんね。

——誰方にお教りでしたか。

——親戚筋に當つて居りますので歌右衛門さんに教はりました。「判官御手を取り給ひ」のところも中啓を右に持ち替へずに、差伸べた手でその儘泣いて居りますが此の方が見た目にも上品で良い樣です。

——義經の場合あなたの何時もの聲とは全然調子が違ふ……

——違ふでせう。これには苦心しましたねエ。お蔭で東京でも義經は大へん賞めて頂きまして、やり甲斐のあつた事を喜んで居ります。

——今後は新作の方へもドシドシ突き進んでほしいと思ひますね。

——勿論その心組みで居ります。御存知の通り亡父も大へん新らしいことが好きで何時も若い私達の方が教へられてゐた樣な有樣でした

——私はあなたが亡父に負けない樣に新らしいものにも手を染めて、新玩辭樓十二曲と云つたものを完成して頂きたいことを希望します

——エ、。私の一生の一仕事とし屹度完成致しませう。

（扇雀君の決意固し）

○

勘彌君の部屋で——

——富樫の御感想を拜聽した

いのですが……

――私は歌舞伎十八番の如何に至難なものであるかと云ふことをハツキリと知りましたね。東京で初演の時、初めて舞臺に出た。處が自分と云ふものが、なさけない程小さなものに見えて仕方がない。丁度大きな池の中のメダカ――と云つた氣持でした。そして只わけもなくボーツとして終つて何が何だか判らない内に濟んで終つて、いゝ出來だつたのか、惡い出來だつたのかそんなことまで考へる餘地がありませんでしたよ。

――今日ではどうです。もう三月目にもなるのですから……

――只その役に慣れたと云ふに止りますね。未だ未だ大きくなるには並たいていの苦勞ぢやありません。全體を通じて辨慶の邪魔にならない樣に腹で十分芝居をしなければならないのですから、私の如き未熟者では未だですよ。

――形を崩さないで長い間坐つてゐるのも苦痛でせう。然し二度目の出からは樂でせう。

――處が全然反對で、私は二度目の出に一層緊張致して居ります。何せあの場合富樫は一ツ間違へば切腹する氣持なのですからね。

――山伏問答は面白いでせう

――二人の意氣の合つた日は實に爽快です。此の點我當君とは永い間一座してゐますので演り良いです。

――扮裝の苦心談はありませんか。

――私は御覽んの通り顏が小さいので困ります。帽子だつて小供の帽子でなきゃ駄目なのですからねェ。で成る可く大きく顏を造りまして、烏帽子もズツト後ろへかむります。そして紐をグツと耳の極くきわへ寄せて結んでゐますが、かうしますと顏が大きく見えませう

――貴樣は良く羽左ソックリだと云はれますが嫌でせうね。

――嫌ですね。例へば與三郎を演る場合、誰だつて市村さんのいゝ型を敎はりに行く、さすれば自然と似通つて來るのは仕方がないぢやァありませんか。私は出來得る限り市村さんとは似ない樣に注意して演つて居りますが、此の方の努力が大へんです。結局、似ない樣にやらうと云ふ氣持が舞臺で動いてゐることは、その方に氣を取られて惡いことです。

――新らしいものを見せて貰ひたいですな。「生きてゐる小平次」程度のもの……「忠直卿」も演つて貰ひたいですね。

――私は綺堂氏の「利根の渡」有三氏の「同志の人々」が演りたいです。

——古いものだつたら「お祭佐七」の通し。

——「め組の喧嘩」も若い人々にいゝでせう。

——是非此の次は……

——エヽ、有難う。

○

松莚君の部屋で——

——此の部屋は先月親父の宗十郎が延三郎さんと一緒にゐた部屋で、その後へ私が陣取りました。

——矢張り親子の絆は何處までも付纏ふのですよ。處で此の月はお富ですな。

——えゝ、お富は梅幸さんが未だ御壯健で源氏店を出して居られた頃に女中に出てゐたことがありまして一通りのことは此の間に覺え込んで置きましたので初演の時は餘程樂で御座ゐました

——でも梅幸さんに敎はつたのでせう。

——えゝ、一番弱つたのは梅幸さんの捨臺詞で、これが毎日の樣に變る、幸ひ梅幸さんの支配人をしてゐらつしやるお方が私とは昵懇だつたものですから、書拔きをこさへて下さつた。さア半紙に十枚位の分量はあつたと思ひます。これを覺えて演つたのですが、どうもいけない。私は始めて捨臺詞の六ツかしさを知りましたね。

——お富は小道具の扱ひが六ツかしいと思ひますか……

——そうです。取り分き煙管の扱ひ方ですね。一例を申しますと、吸つてゐた煙管がつまる。紙を破つて紙よりを作つて煙管を掃除しますが中々巧く通らない。ヤツトして通つた處が丁度蝙蝠安の「譯けが判らねエやア」の臺詞に當るところで此の臺詞が濟むと與三郎が私に近寄つて來る。この「間」でポンと一ツ煙草盆を煙管で叩いて「間」に欲めねばならないのですが、毎日中々巧い具合に段取りが進んで呉れません。一等六ツかしい個處ですね。

——成程、お話を伺つて始めて知つた面白さでした。

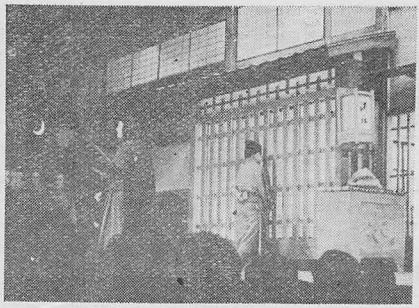
——あの場は與三郎とお富を除けば女中が一番厄介で、臺詞は殆どないのですが仕事は實に多い。ですから女中役中での大ものとなつて

云はれましたので、その後は細かな模様をあしらつて居ります。何卒御批評下さいまし。

——平凡な質問ですが貴様のやりたいもの……

——十六夜ですね。これは是非やつてみたいと思つて居ります。

（意氣に燃えた青年諸君の話語れば何時盡くるとも際限がなきかに思はれた。私は再會を約して樂屋を後にしたのであつた。——一日訪問）



姉小路孝

×　×　×

ゐます。

——衣裳のお好みは……

——三月に東京で使つたものを先月大阪の「梅ごよみ」の仇吉で使つて終ひましたので、新しく造ることにしました。二月に大阪で演つた時好きなので普通のシマを用ひましたが、ジミだと

三つの役

中村芳子

また、因縁で振袖で婚禮する娘をやりますが、今度は駒下駄の時のやうに白無垢を着ないで、黑を着せて頂く事になりました本當は中々婚禮する年では御座いませんが、苦心と云ふのはたゞ多助さんに上手に附いて行けばよいと思ふて居ります。

中幕の「雪野」は書卸しは兄さんのお役で、これも太郎冠者と次郎冠者の二人に惚れられると云ふ役で、これも子供ばなれのした役で、かうなると、いよ〳〵舞臺だけはとしよりです。

二番目の藝者おさんは食滿先生の書入れて下すつた役です。

三ツの狂言で三ツ共出して頂いて何よりと喜んで居ります。

中村扇雀禮讃

木谷利夫

「彫刻家の心に宿るまぼろしは旋律で表はすことの出來ない美くしさであり、音樂家の夢みる藝術境は、カンヴスの上に投射することの出來ない時の流れである。このことを、もう一歩進めて云うならば詩、人は詩でなければ表現の出來ないものを持ち、小説家は散文でなければ表現の出來ないものを持つてゐる。また、江戸ッ子は東京辯でなければ微妙な感じを表はすことが出來ないし、關西人は關西辯でなければ、表はし得ないあるものを有つてゐる」

と言う山本修二氏の言葉は正しい。

近松門左衛門によつて、竹田出雲によつて、並木五瓶によつて、三好松洛によつて、言ひ替へれば坂田藤十郎によつて、山下京右衛門によつて、澤村長十郎によつて中村宗十郎によつて培はれ育てられて來た歌舞伎に於ける大阪の意慾は因より大阪の俳優によつて踏襲され表現されねばならないのは當然であり、そして獨り大阪の俳優のみがそれをよく踏襲し得ると言う事も亦言を待たない。

かうした意味に於て中村扇雀こそは毅然として立つ現代の焦點でなければならないのだ。中村扇雀こそは眞に關西の姿であり味であり表現であり意慾でさへもあるのである。

由來關西は古くより關東に對立して偉大なる一大敵國をなしてゐた。關西人は言う迄もなく東京とは著しく異つた言葉を持ち形式を持ち特殊な持味を持ち乍ら今日迄それを守り續けて來たのである。今俄に中央集權的な行政の意圖が露骨に關西を田舍扱にしやうとしても、關西のその何百千年の傳統は餘りに古く、關西人の慾求は餘りに逞しい。關西は矢張り關西自身の表現を表現として持たうとする慾望に馳られてゐるし獨り歩きの出來る自己の文化をはぐゝんでいくつもりでゐる。

シャリアピンの獨唱も結構ではあるが日本人には矢張り日本の音樂が早判りしていゝのだし、大阪人は矢張りどの道とゞのつまりには文樂や大阪歌舞伎が性に合つてゐる。變つたものも見たいとは思うが、自分の性にあつたものも失ひたくはないのである。

中村扇雀はさうした意味で、一つの運命を與へられてゐると言つていゝ。

世上、大阪趣味の執拗さあくどさに顔を背けるの餘りさうした先入觀を劇の世界にまで及ぼして關西の俳優を兎角無理解にのゝしる人もあるやうだが、一度でその俳優が東京に籍を置くと掌をかへすやうな歡待振りは偏狹な鄉土意識の表はれであり日本第一主義を强制する東京人の横暴にしか過ぎないやうだ。

大阪趣味のえげつなさ、あくどさは、低劣なものにのみ偶々表はれる一種の鄉土的な灰汁であつて今一歩突進んで高く刻み深く堀り下げて行ささへすれば、それは油繪的な濃厚さを表現してゴッホやゴーガンの持つ激越な、傑れた、燃え揚るやうな意志を、境地に展開するに至るのである。獨り江戸前的な水墨趣味のみが最高の美で

讀者寄稿●

はないのである。

中村扇雀は江戸ッ子ではないのである。扇雀の藝風には、江戸趣味とは相容れない、鋭い、強い、大阪的な迫力を包んでゐる。

今日一般に、東京的な感情が雜誌や文學を通じて全國を風靡してゐる現狀では、彼の濃厚な大阪臭は、些か不利であるとは言へ、それは要するに東京を中心とした人々に對して言う言葉であつて、勿論關西は關西として別な觀點に立つてゐること論を待たない。

若き俳優としての中村扇雀を損なうものは必ずしも彼の演技に鴈治郎の面影を忘れ得ない大阪の民衆にあるのではなく、寧ろ水墨趣味的な東京風の物指しで一切のものを無理强ひにはかゝらうとする一部無理解な劇評家にあるのではないか。今少しく關西を愛し大阪を理解するに至るならば無責任な輕卒なかゝる言說が許される筈はないのである。

中村扇雀は大阪のぼんぼんである。大阪のぼんぼんは大阪のぼんぼんでいゝのである。

僅かばかりの文筆家が屯して住んでゐるからと言つて、本當を言へば田舍者の集りのやうな東京のみが日本文化を專有する代表的都市である謂れはなく、それ等の人達が表面東京人であるが故に無理解に筆を曲げる橫暴は許される可くもないのである。

中村扇雀は、より大阪的なものを、より高く、より强く鏤刻すべきであつて、かゝる道こそ彼に與へられた、そして、彼の選ぶ可き唯一つの行手でなければならないのだ。

大阪好劇家に寄す

水落露山

總ゆる文化ジヤナリズムが東京中心で有り東京から見れば大阪は一地方として取扱はれて居る吾國では東京に對立する幾つかのものが刻々に姿を消されて行かねばならないのか。曾ての大阪相撲然り如今大阪歌舞伎の運命は？。相撲界の二の舞を今正に踏まされんとして居る。誠に危なかしい瀨戸際に置かれて居る有樣だ。排他的な東京人は總ゆる物を己が獨占舞臺に引込み度いらしい。燃ゆる烈々たる彼等の鄕土愛は僅かに殘されたる我等の對立物を破壞せずには置かないらしい。大阪俳優をこき下し東京役者演ずる舞臺で非ずば芝居で無しと云ふプライド紛々たる自己陶醉の悅に陷入つて居る。滑稽千萬には此極り無き暴虐を萬人喝采を以て認め持上げ禮讚して居るのだから馬鹿々々しい。手近な例を擧げれば此頃の仁左衞門の持て方は何うだ。大阪俳優であつた時代には東京人から如何に冷遇されて居た事だろふか、否殆んど其存在をさへ認められなかつた彼だ。然るに一朝、東京に移籍した今日は何うだ。其賞讃振は寧ろ噴飯ものだ。鴈治郎縮寫と惡口された扇雀、去月勸進帳の義經を演ずるに關東役者の型を眞似たる處、忽然名優扱の大好評だつた。萬事東京ならでは夜が明けぬ世の中吾人は此責を大阪人に半ば荷すべしと爲す者である。されば大阪人は餘りにも自己卑下者である。商賣上の掛引には必要かも知れぬけれど、文化發展上歌舞伎支持上等から考へれば實に心外慨嘆に堪えざる忌む可き偏見である。止れ大阪人よ、赫々たる鄕土を誇るプライドを持て、東京人が獨占を計り大阪歌舞伎に毒付くならば我亦應戰宜ろしく、彼を漕下げずんばあるべからず!!何ぞ却而關東に雷同爲す不甲斐なさよ心ある大阪兒よ速かに猛省せよ。

青年歌舞伎の勸進帳

森　ほのほ

東京初演の時はみんな大熱演であつたさうだが、私が先月見た大阪歌舞伎座のそれは甚だ頂戴いたしかねるものであつた。東京で意外に評判の好かつたのが、みんなに氣をゆるさせたのか、それとも大阪では二部制であつたが爲にわざと一杯に腕をふるはなかつたからか、恐らくはその兩方であつたのだらうと思ふ。兎に角、甚だあきたらぬものであつて茲に筆を執る小生も實はお辭儀をしたいのである

登場順で勘彌君の富樫から先へ言ふと、押出しは存外立派だつたし、名宣りも好かつたが、アゴを出す癖がいけないのと、足の運びが些かアラかつた。ワキ座へ直つてからは葛桶が少し低いせいか形が惡かつた。（尤もこれはあの高い二階から見物した爲であるかも知れない）問答で双方のセリフがだんだんに懸かつて行きながら、一歩づゝ詰め寄つてその度に形から形と變つて行く形式美を無視してしまつたのは、舞臺効果を減却し、從つて漸次に盛上つて來る興味を索然たらしめてしまつた。勿論これは我當の辨慶にも責任はある。それが爲、「抑々九字の……」の意氣込んで懸かつて行く處が引立たぬものになつたのでもある。

強力を判官と知つての愁ひは出ず、入らずで結構だが、「斯く折檻もし給ふなれ」を「仕給はん」と言つたのは宜しくない。

扇雀丈の判官は摺り足の運びがキレイに行つた。後で聞くと、此人は以前仕舞を稽古したとか。正にそれがお役に立つてゐるのであらう。調子の出し方も大分氣を附けてゐるらしかつた。近頃のいろいろな出來合ひの判官の中では先づ頂ける判官殿であつた。

最初、花道の留る位置が少し舞臺の方へ寄り過ぎたので最後の常陸坊が附際を越して舞臺へ這入らざるを得なくなつたのは、辨慶の臺詞ではないが言語同斷である。〈關の

こなたに立懸る――で唄三味線一パイに辨慶始め一同が本舞臺へ這入るのが本當であるのを、それが切れても裕々として後から跟いて行くのは甚だ心得ぬことどもである。

判官、辨慶の述懷になる件上手へ直る判官の位置が少し上手へ寄り過ぎた。（大阪歌舞伎座の舞臺がダダ廣いにしてもである）例の〳〵判官御手――の形は左程難しいものとも思はれないが、滿點までもう一息といふ處が見えた。

我當の辨慶は勘彌の富樫と同じく、押出しは思つた以上に好かつた。舞も相當なものだつたが、問答は可くなかつた。形式美を忘れたことは前に述べた通りである。

最後の祈りは、それらしい氣持ちが出なかつた。これは辨慶の示威運動でもあるが、まかり間違へば本當に最後の祈になるかも知れないのである。辨慶始め四天王にその氣組が無くてはならない。お囃子連中の方もさうだ。たゞ撥をチャラチャラ器用に動かしてゐるだけではいけないのだ併し今度のみでなく、いつ、誰のを見ても、此處の件はなつてない。先づ一度能のイノリを見て來るのが何より早手まはしだ。此處で「誅、せられうずるにて候」と切つていふのも、讀み上げの件で、見得極つてから卷物を高く上げ平に差し出すのも、幸四郎の惡い處を其儘に眞似たものである。

感心しない。勸進帳中の「貫く思ひを前途に翻し」は貫く思ひを切らずに、續けて言ふのが本當である。

讀上げてからの不動の見得は左の手が少々高きに過ぎて形が好くない。後の元祿見得も整然たるものではない。形の序に言へば、〳〵程もなくなく痛はしやと――で、左の手を突いて判官を見上げた場合右の足が伸び過ぎてゐたし、舞になつて腹を出す姿勢も面白くない。

臺詞では前述のもの〻外に「大、日本」と切つて言つたり、「佛門修行はいぶかし〻」を修行ナと訛つたりしてゐたのもいけない。

舞は吉右衛門のが一番本格的だが、此人のは餘り笛の譜に重きを置かない芝居流の演り方であつた。併し舞は相當にこなせてゐた。その外、四天王はサラサラ演つてゐるのが好く、番卒も眼障りにならなかつたが、印象が殘る程の處もなかつた。

長唄は唄も絃も餘り感心出來なかつたが、「片ヒクシマも……」などと片言を平氣で言つてゐるのが何よりも不愉快だつた。

文樂座
六月興行
毎日三時開演

熱だけで

守田勘彌

六月は京都南座で私の役は太十の久吉。京の友禪の友七勸進帳の富樫、玄冶店の與三郎の四役です。此の内友七だけが初役です。最初此の京の友禪の本を拜見した時から何んとなく友七と言ふ人物の氣持ちが私の心と共通點が有るような氣がして（自分だけの考へですが）演りよいような氣が致しました、それに此の狂言はどなたにも、むき、それで居て登場人物の一人々々が個性を生かして居られるのはさすがに岡本先生だと思ひます。次は富樫ですが此れはあまりに大役なので申しようも有りません、私達に取ってこう言ふ大物は只熱だけですそれで、我慢して戴くより有りません。次の與三郎は今年大阪歌舞伎座にて初演と言ふ思ひ出の狂言です。以來東京で一回と今回で三度目です（三度目の正直）と言ひますから（すこしはうまくなつた）と皆さんから言はれたいのですが私しは此の役が性に合はぬと言ふのか何だか非常に演りにくいので再三再四お斷はり、したのですが會社の方からぜひやれとの御命令でいう〳〵三度目をやるのですがやりたくない役をやらせるのはどうも會社は變體性ではないでしょうか？

小春の着付

中村成太郎

六月は先月歌舞伎座で演つた河庄の小春を又演ります、今度は成駒家さんの御注文で後の出から着付けを替へます是れが本當です着替の着付の下着は治兵衛の着付の下着と「そろひ」です、下着が「そろひ」だと後の方に成ってから色々と仕草に面白い事が出來ます。小春と云ふ役は「もたれた」役として代表的な物ですが、私しは決して人様が云はれるほどではないと思ひます、初め出た時から幕切れ迄たのしんで演って居ると心持ちも、つゞいて來て面白いほど氣持ちの好い役だと思ひます。派手に出て手紙を見て沈み夫れから夫れと一寸說明の出來ないほど複雜な心持ちです、サワリも其の點で隨分色々かへて演って居ります。

とにかく邪魔に成らない程度で役の心持ちを出して行く、そこにたのしみがあるのだと思ひます、後半は殆んどセリフは有りません、夫れに居て重大なセキニンが有るのです、どんな工合に樂しんで演って居る？　御再覽を願ひどし〳〵御注意を下さる樣お願ひ申します。

●葉柳抄●

入江來布

―中座歌舞伎讃頌―

葉柳に皐月狂言何々ぞ
夏芝居むかし團扇のなつかしき

經濟鑑

皐月富士むらさきなせる大空に
青嵐多助か馬を木の間かな

籠釣瓶

夏櫻沛然として降りにけり
閃々とあやめ菖蒲の光るかな
皐月浪つるぎのみだれひらめきて

魁車丈の八ッ橋に

紫陽花や鏡の前の女形

南北子の新作「戀扇」

何かきて扇に寄する思ひかな
ひら〳〵とわれももちたる扇かな

大森痴雪さんを悼む

鳥江銕也

松竹合名社といつた頃、大正八年である。今の、松竹興行宣傳課の前身、通信部に僕が入社して、その仕事初めにさせられたのが、浪花座十一月興行の新聞廣告の原稿だつた。

十月興行からの打越しで、一座は鴈治郎、福助（現梅玉）、魁車、多見蔵、市蔵、雀右衛門、先代梅玉の關西大歌舞伎

十月に出した菊池寛原作、大森痴雪脚色「藤十郎の戀」一幕が非常に大當りを取つて、劇界の異例ともいふべきこの狂言のみを次へ持越しての替り狂言である

鴈治郎の藤十郎、福助のお梶の寫眞を入れて、この名作を天下に廣告する名文を、小半日も掛つて頭をひねつたものだ

南區笠屋町の格子造りの松竹事務所には今と違つて白井社長を始め僅々二十人足らずの社員が勤務してゐた。僕の机のすぐ隣りには今「きしもと」にゐる藤田草之助君がゐて、僕が廣告の文案を考へてゐると、いろ〳〵と智惠を借してくれたりした。

實際、そんな廣告を書きながら大森さんは偉い作者だと思つた。

神戸の柳原の、或るお茶屋の奥まつた二階座敷だつたと記憶する。そこに岡崎茂一郎君がゐた。山下秀一君と二人、岡崎君を訪問して、三人の演劇青年は、當時の劇壇について、相當議論を戰はしたやうだ。岡崎君はその頃「頼朝と文覺」といふ脚本を書いて、大森さんの推薦で中座に上演した。

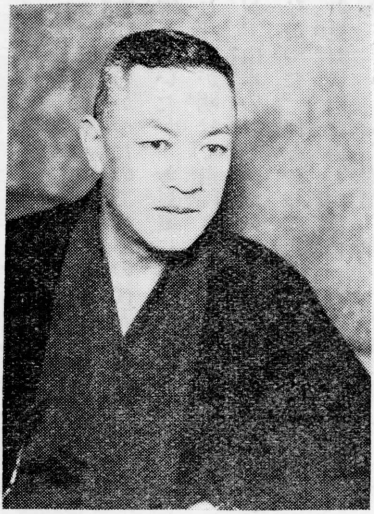
山下君もそれと前後して、やはり大森さんの世話で「生命」といふ脚本を上演した。

二つ共、當時の歌舞伎畑には珍しい新劇風の脚本で、大いに認められたやうだつた。

聞く所によると、大阪の歌舞伎が新史劇だとか、新世話劇を上演するやうになつた最初に、忘れてならないのは大森さんの功績と、食滿南北さんの努力があつたやうに思ふ。その片棒をかついで、大阪劇壇の新氣運のために働いた大森さんが急逝され、そのお弟子さん達の手で、盛大な葬儀もすまされたのだ。

岡崎君や山下君は、かつて君達が異色ある脚本を書いた當時にさかのぼつて、大いに大森さんの偉業を繼承してもらひたいものだと、ふツと遠い追憶の中にある神戸のお茶屋の二階を思ひ出した。

現松竹の企劃課長大西利夫さんが主事といふ格で、角座に新劇一派といふ新派劇が組織された。一座は小織桂一郎、英太郎、柳永二郎其他であつたやうに思ふ。當時東京には劇作家協會といふのが出來て、脚本料などの制定が議決された。それによると一幕の脚本料は二百圓以上といふ事であつた。それを聞いた大森さんは自分達の脚本は、決して東京の作品のものに、優るとも劣るものでないといふので、新劇一派に書いた一幕の脚本料は、食滿さん等と申合はせて、金二百〇壹圓也を松竹に請求されたさうである。そんなことにも大森さんの氣骨の一端がうかゞわれる。



大森さんの書いた芝居の廣告文案が、僕の松竹に於ける仕事初めだつた因緣が奇しくも大森さんの最後の仕事にも私が關係してゐた事である

昨年の十月、もうその頃の大森さんはよほど病狀がすゝんでゐて、聲がかすれてゐた。毎日病院通ひをしてゐられたやうで、十一月興行に延若、魁車のために尼ヶ崎屋庄兵衛を書くについて、もう一つ引受けてゐる脚本がどうしても出來なかつた。そこで、この分は鳥江君に書いてもらひたいと、僕に讓つて下されたのが、釋瓢齋さんの「鎭撫使さんとお加代」の脚色だつた。僕は早速、この仕事を大森さんとの協同制作といふ事にして、中野のお宅へ伺つた。折柄、大森さんの友人某が來合せて、今の山本の新築に用する庭石のいゝのが手に入つたといふ話をしてゐられた。

脚色の打合せをすませて、僕は早速執筆に取掛つた。

丁度「尼庄」と前後して、僕の「お加代」も出來たが、演出すべてを僕に任して下された。僕は番附面にも大森さんとの協同脚色になつてゐるので、隨分責任を感じた。が、幸ひと好評でもあつたし、大森さんもその出來の無難なのに嬉こんで下された。

十二月に入つた。僕は會社の仕事で非常に忙しかつたので、その後入院された噂も聞いたが、お見舞に行く暇がなかつた。年が明けて退院された噂も聞いた。が、山本のお宅へお見舞に行く事も出來なかつた。何とかして折りを見て、一度お見舞に出たいと山上貞一君と相談し合つてゐるうち、突然、悲しい訃報に接した……。五月二十七日夜、山本の木の香新しいお宅へお悔みに伺つた時、かつて中野のお宅で友人某氏から庭石のいゝのが手に入つたと聞いて、よろこんでゐられた圓滿なお顔を、その棺前の香煙の中に思ひ浮べて胸が迫つた。

大森さんは何といつても大阪劇壇になくてならない人である。劇界多端の折柄氏を失つた事は大きな損失である。

繁華街に近く、交通至便
閑雅な和洋室！
◇モダン階上浴室新設◇
南地ホテル
宿一 三圓 二圓半 一圓半 額 憩
南地戎橋電停前
電話南四一四〇四四一

大役の數々

片岡我當

引續き京都南座へ出勤させて頂きます。どうかよろしくお願ひ致します。私としては先月大阪で演じました狂言は全部取り替へて頂きたかつたのですが、どう言ふ御都合か辨慶と河庄が殘る事になりました。辨慶の感想は先達て各新聞で述べさせて頂きました事故こゝには申し上げません。

孫右衛門程氣の疲れる役はありません。なにしろこの陽氣に長い時間頭巾をかぶつてぢつと座つてゐるだけでも樂ぢやア有りませんし治兵衛の仕勝手をよく考へて演らねばなりませんから何しろつかれます。

光秀も亦苦しい役です。夏狂言でありながらこしらへ(着付)は冬なのですからこれも實に暑い役で然も見物に少しも同情されぬ役で私のような若輩者には至難中の難役です。いつも私は木登りを演るのですが今度は時間の都合やら何やかやでぬかす事に致しました。何にしろ光秀、辨慶、孫右衛門、それに生世話ものでのむづかしい役『蝙蝠女』まで引受けてゐますので身體が續くかどうか自分にも一寸自信がつきかねる次第です。然し倒れるまで努力をつゞける決心でおります。相變らず御後援の程を幾重にもお願ひ申上げます。

お時ちやん!

栗島すみ子

戀慕小路に
今日も亦降る
雨が降る
涙の雨が
今日も亦降る
涙の雨が
濡れ小袖——

お時は、こんな唄を歌ひたかつた。毎日歌ひたかつた。しかし聲を出して唱へなかつた。

心の中で、さみしく悲しく歌つた。

でもいくら歌つても泣いても、お時の心は、お時の身はどうすることも出來なかつた。

「戀愛三昧」の緋沙子は、たゞ一途に戀を思ひつめる女でした「悲しき戀の幻想」を持つ女でした。

「戀慕小路」のお時は、もつと戀愛と云ふものゝ現實にぶつかり、肉體と云ふものゝ現實にぶつかり、其處に悲しみ苦しみ悶へ戰ふ女です。

しかし、女性であるが故に、女性だけが知る悲しみと苦痛、そして現在何處かに現實に生きて居る女です。

お時の心理道程を、ほんとにつかんで舞臺に生かして行きたいと思ひます。

「戀慕小路」のお時、ほんとに、今、つい其處いらに生きて居る女性の一人だと存じます。

編輯後記

★雨の多い晩春でした。梅雨が一足先きに來たのではないかとあやぶまれた程なのでした。しかし今日あたりから本格的な初夏の暑さに向つて來た樣です。此の調子だつたら、暑さがドッと一時に堰を切つて押寄せて來るのではないでせうか。舞臺で働く人もこれからの暑さが一苦勞でせう。

★本號の呼びものは「樂屋で語る」の一問一答記事です。絕對他誌では見られない內容と敢て自負します。「勸進帳グラフ」も型の研究と對照されれば興味津々たるものがございませう。

★五月は東京まで足を延ばしましたので文字通りの東奔西走のいそがしさでした。その間に大阪の水落氏からと奈良の木谷氏からの寄稿を得ました。斯くして一號一號と內容のの賑つて行くのは、編輯にたずさはる者にとつて、此れに越した喜びはありませぬ。より一層の御支持をお願ひ申し上げます。

（京都・大橋孝一郎）

※今月は僕が多忙なため、編輯の時間に困つてしまつた。徹夜作業の强行軍である。特輯讀物にもつと〳〵力を注ぐ考へである。源多君にも今月はお手傳を希つた。

※作談は、岡本先生に寺田氏、それに本誌には久々で食滿先生が中座の「戀扇」に就いて執筆された。編輯者は非常に嬉んでゐる次第。

※グラフは特寫を二頁挿入しましたが、毎號この程度のものを續けたく思つてゐる。

※各座は各劇團が颯爽と活躍してゐるが、トピックとなつたのは、日本俳優學校劇團の角座來演で、これには菱田氏が語られ更に協同出演の關西新派のC・C倶樂部員が學校劇團を迎へる言葉を寄せられた。

※私はいま悲しいお知らせをしなければならない——關西劇作家の雄であり、本誌にも種々御厚配下すつた大森先生が五月廿六日お亡くなりになつた。作家訪問の第一陣で本誌のために種々お話し下すつたのもいま悲しい思ひ出である。謹しんで哀弔の意を表します。

（村上　勝）

昭和十一年六月一日發行
月刊 雜誌『道頓堀』第十一年 第百十七號

◇誌代は前金でお拂ひを願ひます。
◇郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所 大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部 金參拾錢（郵稅壹錢五厘）

昭和十一年六月一日印刷
昭和十一年六月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興業株式會社大阪支店
發行者 鳥山江鐵也
共同編輯 松本泰一
印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興行株式會社大阪支店
發行所 道頓堀編輯部
編輯 京都支部
京都市姉小路東洞院西
大橋孝一郎方

あぶら取紙始祖　辻占添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉
スキナ石鹸

專賣特許　實用新案

スキナ御化粧紙
（あぶら取兼紙白粉）

各品共御愛用を乞ふ！

登録商標

發賣元　大阪　朝日堂株式會社
本舗　大阪　中田スキナ屋謹製

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十一年五月廿一日印刷（毎月一回）
昭和十一年六月一日發行（毎月一回）

ラヂオは

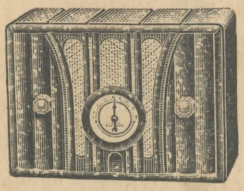
シヤープ受信機

新發賣

200型

三球ベントード

シヤープライト製キヤビネツト
エヤープレンダイヤル付
UY 24 B. UY 47 B. KX 12B
マツダ眞空管付



定價 ￥27.00

シヤープライト製
キヤビネツト小型ラヂオ

シヤープライト—樹脂と特殊化學原料とを合成したものを金屬型に入れて高溫度を加へ壓縮塑造されたものであります

シヤープライト—表面．內部共同一の美麗な模樣あり．纖目．側れ目なく歪み．變色．艶褪しません

シヤープライト—濕氣を吸收しない．理想的な電氣絶緣材料であり燃る高溫によく耐えますからヒび等絶對に生じません

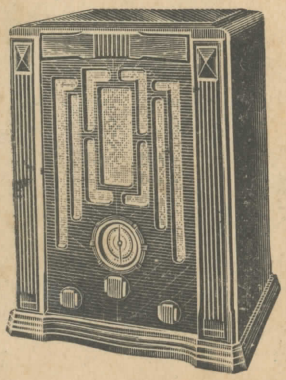
以上の様な特徴がある上に装備したエアープレンダイヤルは此種塑造品中初めて「シヤープ」に依つて完成美化されたもので當代隨一と敢て斷言致します

新發賣

48型

遠距離用
四球ベントード
エヤープレンダイヤル付
UY 24 B. UY 24 B. UY 47 B. KX 12B
マツダ眞空管付

定價
￥46.00



株式會社 早川金屬工業研究所

「道頓堀」 第百十六輯 第十一年 六月號
一部 金參拾錢